

# 五斗田遺跡

— 県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 —

2 0 0 1

長岡市教育委員会

## 序

本書は、長岡市桂町と亀崎町を対象に計画された県営ほ場整備事業山北第三地区事業に伴って実施した五斗田遺跡発掘調査の報告書です。五斗田遺跡は、平成8年度の確認調査で発見された弥生時代終わりごろから古墳時代初めごろの遺跡です。

今回の発掘調査では、高床の建物などの遺構や、管玉・ナツメ玉などが発見されました。その他、木の根っこが立ったままの姿で発見されるなど、集落を取り巻く自然環境を含めた当時の集落の様子を垣間見ることができる貴重な資料が得られました。

また、五斗田遺跡の周辺には環濠集落の横山遺跡や、方形台状墓の藤ヶ森遺跡など弥生時代終わりごろの遺跡があります。これらの遺跡群と五斗田遺跡発掘調査の成果とを考え合わせますと、見附市との境界付近における弥生時代終わりから日本が統一に向かう過程での地域様相の一端が明らかになってきたものと思われます。

本報告書が学術研究のうえで広く活用され、また埋蔵文化財の理解と認識を深められることを期待します。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり事業主体の新潟県農地部、山北土地改良区、地元協議会をはじめ、多くの方々や機関から多大な御協力をいただきました。心からお礼を申し上げます。

平成13年3月

長岡市教育委員会

教育長 笠輪春彦

## 例 言

- 1 本書は、新潟県長岡市亀崎町字五斗田にある五斗田（ごとだ）遺跡発掘調査の記録である。
- 2 五斗田遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業山北第三地区事業計画に伴って、平成11年度に現地での発掘、平成12年度に整理作業と報告書の作成を行った。
- 3 発掘調査は、事業主体者の新潟県長岡農地事務所からの依頼を受けて、長岡市教育委員会が行った。
- 4 発掘調査の経費は、新潟県長岡農地事務所と長岡市とが費用負担契約を締結して、ほ場整備事業経費のうち農家が負担する9%相当額を長岡市が文化庁からの国庫補助金と県費支出金の交付を受けて負担し、残りの91%を新潟県長岡農地事務所が負担した。
- 5 発掘調査は、長岡市教育委員会職員の駒形敏朗が文化財保護法上の調査担当者として行った。調査組織は次のとおりである。

調 査 主 体：長岡市教育委員会（教育長 大西厚生・笠輪春彦）  
調査担当者：駒形敏朗（科学博物館副主幹）  
調 査 員：鳥居美栄（科学博物館学芸員）  
作 業 員：長岡市亀崎町有志・長岡市民  
調 査 事 務：長岡市教育委員会科学博物館（館長 渡辺 央）
- 6 発掘調査で出土した遺物及び測量図面並びに写真等の記録は、長岡市教育委員会が保管している。
- 7 出土品に出土位置などの記入は、ゴトダー取り上げ番号－大グリッド－小グリッド（もしくは遺構番号）－出土層序の順で記入した。
- 8 本報告書の作成には、駒形・鳥居が、整理作業員の補助を受けて図版の作成から本文の執筆まで行った。執筆分担は1・2が駒形、3～5が鳥居で、編集は鳥居が行った。附編については、自然科学分析を各業者に業務委託し、その結果を基に加藤正明（科学博物館主査：地学研究室学芸員）が執筆した。自然科学分析を委託した業者は次のとおりである。

放射性炭素年代測定：株式会社パレオ・ラボ（平成11年度）、株式会社地球科学研究所（平成12年度）  
珪藻分析：パリノ・サーヴェイ株式会社  
花粉分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
- 9 挿図のうち、地形図等で方位の記入がないものは、真北を図の上にそろえた。また、遺構平面図の方位は磁北を指す。遺構断面図脇の数字は、標高（単位：メートル）である。遺物実測図で赤彩部分は細かいスクリーントーン、黒色処理の部分は粗いスクリーントーンで表現した。
- 10 五斗田遺跡の発掘調査には、現場での発掘から本書の作成まで、数多くの方々や機関から御指導・御協力をいただきました。氏名等は明記しませんが、ここに心からお礼を申し上げます。

# 目次

<b>1 環境と歴史</b> .....	1
<b>2 調査の経緯</b> .....	3
(1) 発掘調査に至るまで	
(2) 発掘調査の経過	
(3) 層序	
<b>3 遺構</b> .....	5
(1) 掘立柱建物跡	
(2) 土器溜まり	
(3) ピット	
(4) 方形周溝状遺構	
<b>4 遺物</b> .....	8
(1) 弥生土器	
(2) 土師器	
(3) 石器類・玉類	
(4) 木製品	
(5) その他の遺物	
<b>5 まとめ</b> .....	14

参考文献

附編 微化石分析及び放射年代測定

## 挿図目次

第1図	五斗田遺跡及び弥生遺跡（●）並びに古墳群（▲）
第2図	五斗田遺跡及び藤ヶ森遺跡
第3図	土層柱状図
第4図	遺構全体図
第5図	第1号掘立柱建物跡
第6図	第2号掘立柱建物跡・土器溜まり
第7図	ピット
第8図	方形周溝状遺構
第9図	出土遺物1
第10図	出土遺物2
第11図	出土遺物3
第12図	出土遺物4
第13図	出土遺物5
第14図	出土遺物6

## 写真目次

写真1	遺跡、調査風景
写真2	掘立柱建物跡
写真3	土器溜まり
写真4	ピット（VIC-P1、VII B-P1）
写真5	方形周溝状遺構
写真6	遺物出土状況
写真7	出土遺物
写真8	出土遺物
写真9	出土遺物
写真10	出土遺物
写真11	産出花粉化石
写真12	産出珪藻化石

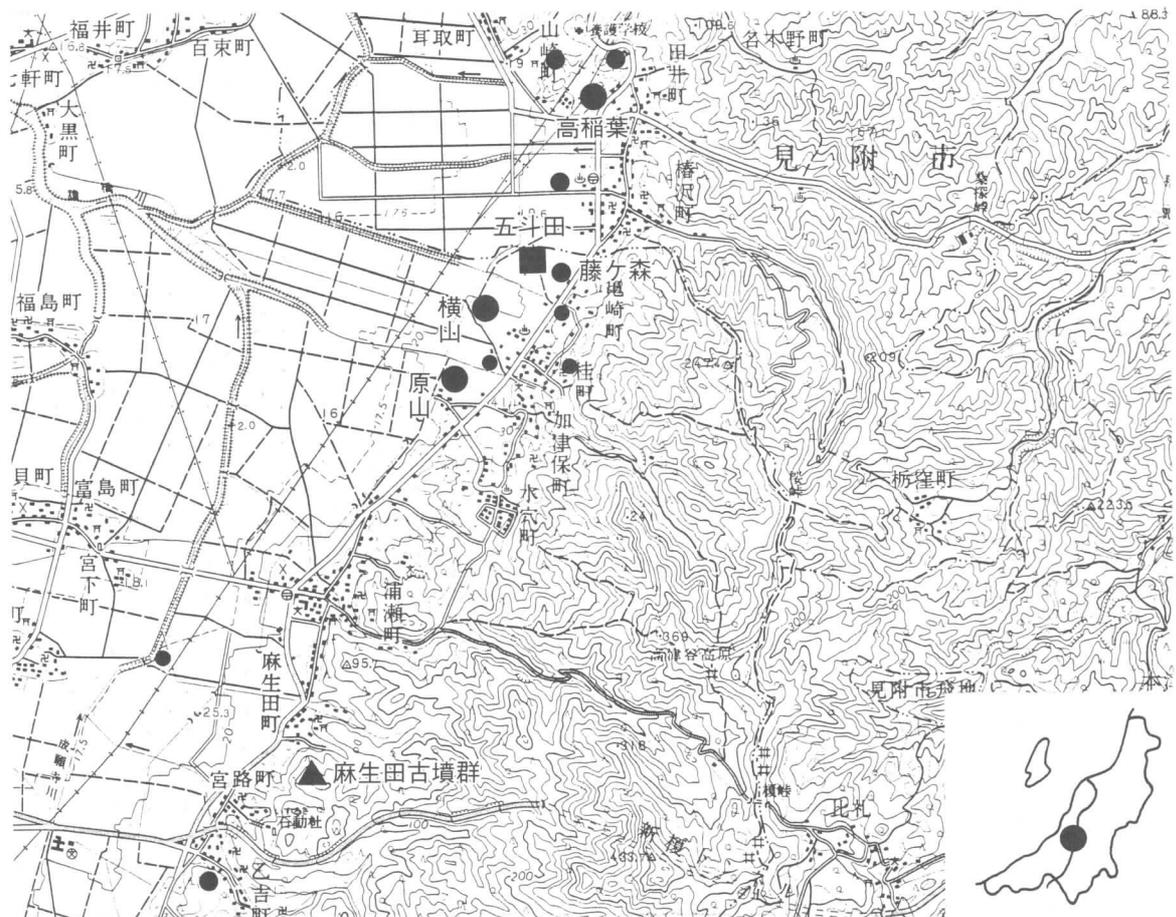
## 1 環境と歴史

千曲川が信越国境を超えて信濃川とその名を変え、左右に日本有数の河岸段丘を形成し、川口町で魚野川を合流し、下流の小千谷市付近で穀倉地帯の新潟平野が開けてくる。この信濃川は長岡市のほぼ中央部を貫いて北へ向かって流れている。長岡市を流れる信濃川の左右には新潟平野が広がり、左岸には河岸段丘が発達し、その後背地に西山丘陵が南北に連なっている。かたや信濃川右岸の東側には沖積地の新潟平野を挟んで東山丘陵が南北に延びている。東山丘陵から信濃川の支流である太田川や栖吉川などの中小河川が沖積地を横切るように流れ、山裾から沖積地にかけて谷口扇状地を形成している。

五斗田遺跡が位置する長岡市の北東部は、東山丘陵から椿桂川・浦加桂川などが流れ出て、湿地帯の通称「八丁沖」を通過して最終的に信濃川に注ぐ。長岡市の北東部の山北地区は、北側は沖積地及び東山丘陵と地続きで見附市に、東側は東山丘陵を分水嶺として栃尾市と接している。

五斗田遺跡は、弥生時代後期の藤ヶ森遺跡がある東山丘陵から突き出た尾根が西の沖積地に埋没するところの水田に位置している。標高は約20mで、尾根とは約6mの標高差がある。遺跡の北側は東西に流れる排水路が行政上の境界線となって見附市と接している。このことから遺跡は北側の見附市にも広がっているものと思われる。また、東山からの椿桂川・浦加桂川などの小河川は、これまでに数回の洪水を起こし、遺跡周辺は大正末期に発生した栃尾郷大水害で水田の畔が流されるほどの被害が発生し、昭和初期に復旧工事として水田の改良工事を行っている。

五斗田遺跡が所在する長岡市北東部から見附市にかけては、弥生時代から古墳時代の遺跡が多数所在している。弥生時代の遺跡としては、見附市側に高稲場遺跡などが、長岡市側には藤ヶ森遺跡・横山遺跡・



第1図 五斗田遺跡及び弥生遺跡 (●) 並びに古墳群 (▲) (1/50,000 長岡)

原山遺跡・岩村遺跡・堅正寺遺跡などが所在している。見附市高稲場は環濠集落と考えられている遺跡で、高稲場と五斗田の間あたりの沖積地にあった小高い丘から弥生土器が採集されたという弥彦森がある。長岡市藤ヶ森は東山丘陵から西の沖積地に延びた尾根筋の先端部にある弥生時代中期から後期の集落跡で、平成10年の発掘調査で竪穴住居跡1軒と前方後方形の方形周溝墓1基などを調査した。また、藤ヶ森は集落域の後背地にあたる丘の上に2基の方形台状墓があり、集落と方形台状墓や前方後方形の周溝墓などの墓域が一体となった遺跡である。位置的には五斗田遺跡に近接している。横山は五斗田や藤ヶ森から南の沖積地に浮かぶ小高い丘（残丘）にある遺跡で、戦前の鉄道敷設工事や戦後の土砂採取のために遺跡の大半が削平されていたが、昭和60年の試掘調査で弥生後期の環濠集落跡であることを確認し、翌61年に本発掘調査を行った。調査では4軒の竪穴住居跡と新旧3本の環濠、それに環濠の外側の傾斜で方形周溝墓1基を検出している。原山は横山からさらに南にある残丘上の遺跡で、発掘調査されていないが、戦前の鉄道敷設工事で削られた西側の断面にU字形の溝が確認されている。この溝は環濠もしくは方形周溝墓の溝と考えられている。時期は弥生中期から後期の遺跡で、多くの玉類が採集されている。堅正寺は五斗田や横山などが所在する山北地区から南に下った悠久山にある遺跡で、遺跡が沖積地との標高差約45mの高台に位置するなどから弥生時代後期の高地性集落の性格を備えていたと考えられている。乙吉町にある岩村も立地などから高地性集落の可能性が指摘されている遺跡である。見附市の南端部から長岡市の悠久山に至る東山丘陵沿いには、倭国大乱などに備えた集落である弥生後期の環濠集落や高地性集落と考えられる遺跡が並んで位置しており、早くから水田開発による経済力などを背景にした一大勢力圏であった様相がうかがわれる。

次の古墳時代に入ると、当時の墓制を象徴する古墳が同じく見附市南部から長岡市の東山丘陵沿いに分布している。五斗田遺跡からやや南に下った山本地区には2基の古墳からなる麻生田古墳群が、さらに南の乙吉には7基の古墳の七つ塚古墳群がある。麻生田古墳群は、東山丘陵が沖積地の方向に延びた尾根の、標高110mから113m、沖積地との標高差約90mの眺望の良い北西斜面と尾根の最高所の上に1基ずつの古墳が位置している。昭和62年に長岡市史編さん事業で確認されるまでは中世の山城跡と考えられていた遺跡である。そして、平成2年に測量調査を行い、1号墳は楕円形の造出付円墳、2号墳は低い円墳であることを確認した。また、七つ塚古墳群は中世もしくは近世の塚群と考えられていた遺跡で、墳頂部が平坦に広がる形状から古墳と考えている遺跡である。しかし、稲作経済を背景にして古墳を造営する勢力が根拠にしていた集落跡の分布は、これまでは信濃川左岸の浄円寺山遺跡（上除町）の1箇所しか確認されていなかった。しかも浄円寺山は古墳中期の土師器の高杯と小甕の破片が1点ずつが採集されているだけで、その詳細な内容は不明である。特に、弥生時代後期の環濠集落や高地性集落が並び、2箇所に古墳群が確認されている東山丘陵沿いには古墳時代の集落跡は、平成8年の試掘調査で確認された五斗田遺跡が最初であり、今のところ唯一の集落跡である。

## 2 調査の経緯

### (1) 発掘調査に至るまで

平成7年度に長岡市北東部の桂町・亀崎地区一帯を対象にして県営ほ場整備事業山北第三地区（担い手育成基盤整備）が計画された。計画地には平成5年度の新潟県遺跡詳細分布調査で発見された藤ヶ森遺跡と、昭和60年に遺跡全体を発掘した横山遺跡が含まれていた。長岡市教育委員会は直ちに長岡市農林整備課を通して、事業主体者の新潟県長岡農地事務所や地元の県営ほ場整備事業山北第三地区協議会などと埋蔵文化財（遺跡）の保護についての協議に着手した。長岡市教育委員会と事業主体者側は協議を重ねたのち、平成8年春に藤ヶ森遺跡の確認調査を行い、その結果をみて具体的な遺跡の保存方法について検討することで合意し、平成8年4月に藤ヶ森遺跡の確認調査を実施した。五斗田遺跡は藤ヶ森遺跡の確認調査の際に、藤ヶ森遺跡に近接した東北電力送電線の鉄塔付近の水田から遺物が採集され、未周知の遺跡として県営ほ場整備事業との協議の対象に加えることになった。なお、遺跡名は地名の小字から五斗田遺跡とした。五斗田の試掘（確認）調査は藤ヶ森遺跡確認調査と同じ平成8年の、稲刈り後の10月に行い、包含層の深度が表面から1m近くに存在する面積が約2万平方メートルにおよぶ遺跡であることを確認した。平成8年の藤ヶ森と五斗田遺跡の確認調査の成果をもとに事業主体者と具体的な遺跡の保存方法についての協議を重ねた。協議の内容は、①藤ヶ森遺跡は方形台状墓がある丘は県営ほ場整備事業から除外して農村公園などとして現状のまま保存し、遺物が出土した尾根の先端部の畑地は発掘調査して記録を保存する、②五斗田遺跡は基本的には発掘調査を行って記録を保存するが、できる限り発掘面積を少なくして盛土保存の面積をより多く残すことなどである。このため、五斗田遺跡付近におけるほ場整備の実施設計につい



第2図 五斗田遺跡及び藤ヶ森遺跡（1/2,500）

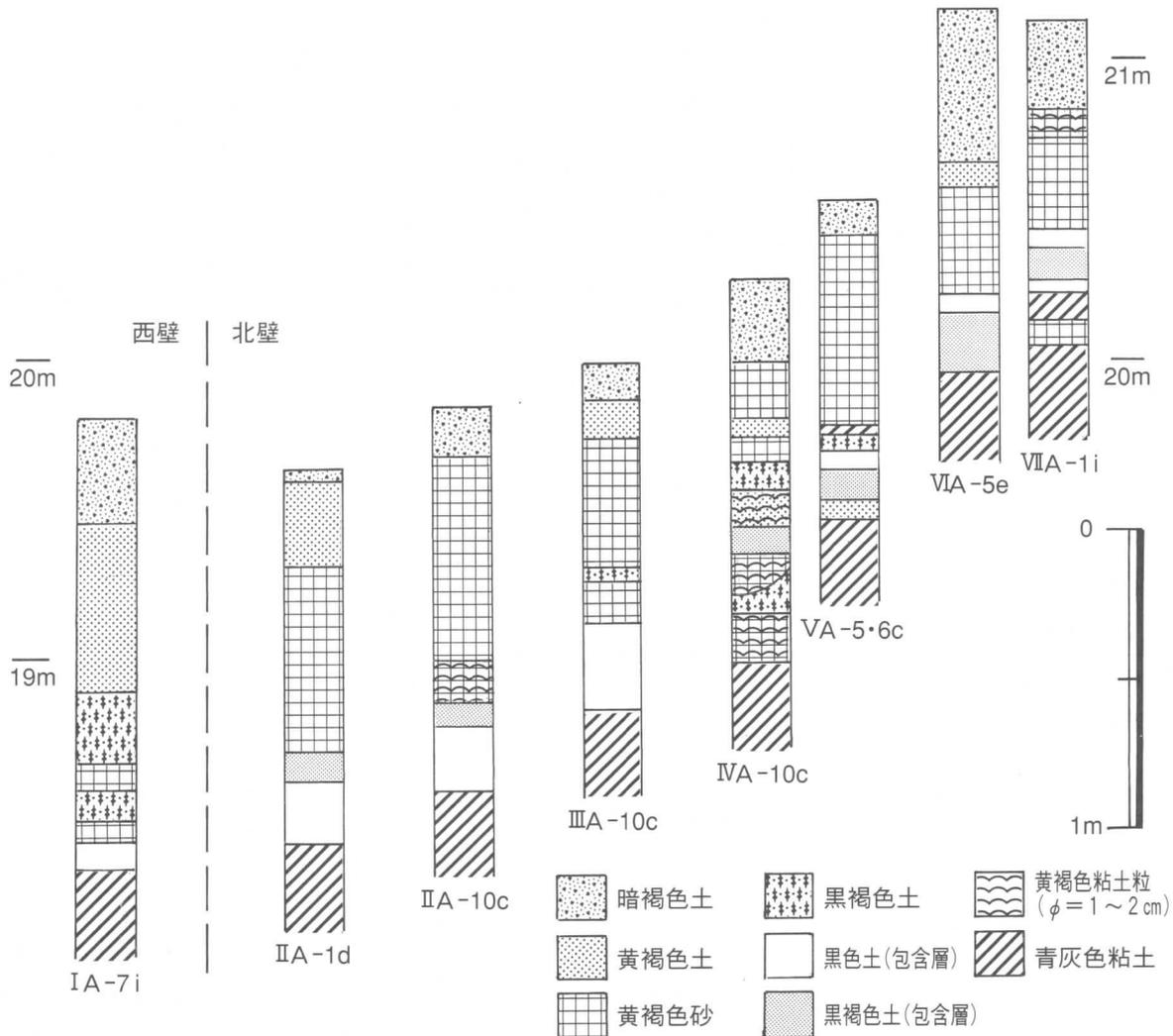
ては、事業主体者と数回の意見交換を行った。その結果、発掘調査面積を約5千㎡に収め、平成11年度に発掘調査を実施し、整理作業から調査報告書の作成は平成12年度とすることで合意した。

## (2) 発掘調査の経過

五斗田遺跡の発掘調査は県営は場整備事業に伴うもので、平成11年4月には場整備事業の主体者である新潟県長岡農地事務所と発掘調査に係る費用負担契約を締結する。そして、発掘調査支援業務を指名競争入札により落札した株式会社大石組に委託した。

発掘調査は準備として、①現場事務所の設置・開設、②包含層までの土砂の除去（パワーシャベルなど）、③安全施設の仮設工事、④ベルトコンベアー・発電機などの搬入・設置などを5月下旬に行い、6月3日から人力による発掘調査に入った。この準備段階で十数本の根が張っている立木と、大きな葉っぱの葉脈化石などをこれも数カ所で確認し、合わせて方形周溝状遺構などを包含層上面で検出した。

人力による発掘調査は主に次の段階を踏んで進めた。①包含層発掘、②遺構検出、③遺構発掘、④遺跡全体写真撮影、⑤遺構全体測量。また、方形周溝状遺構などの遺構は個別に写真撮影と測量、一括土器や棗（なつめ）玉などの遺物もそのつど個別に写真撮影を行った。そして、11月中旬には現場における発掘調査を終了し、事業主体者から要請があった発掘現場の埋め戻しが12月中旬に終わり、ここに現場におけるすべての調査が終了した。



第3図 土層柱状図

### (3) 層序

本遺跡の現況は水田であるが、東山からの小河川がたびたび洪水を起こしてきた地域でもある。層序は基本的には4層に大別でき、現在の耕作土である表土（Ⅰ層）、洪水により堆積したとみられる黄褐色砂層（Ⅱ層）、黒～黒褐色粘土の包含層（Ⅲ層）、青灰色粘土の地山（Ⅳ層）となる。

Ⅰ層は暗褐色の水田耕作土で、Ⅱ層との間に洪水後の復旧工事で盛られた黄褐色土の層をもつところもある。Ⅱ層は、35～80cmの厚さで堆積している黄褐色砂であるが、その中に黒褐色土や青灰色粘土の層が挟まっているのを確認できるところがあり、繰り返し洪水があったことを表していると考えられる。Ⅱ層に挟まれている黒褐色土から遺物の出土はなかった。

包含層であるⅢ層は黒～黒褐色粘土である。植物遺体を多く含み、泥炭のようになっている部分もある。包含層の厚さは15～30cmで、遺物の主体である土師器は包含層上面付近から出土し始めるが、包含層上面から5～10cmぐらいの深さにやや多く出土する傾向がみられた。粘性の強い包含層と明瞭な境がない状態で黒色がかかった青灰色粘土の地山漸移層があり、地山の青灰色粘土層に至る。地山面は西方向に緩やかに傾斜している。

## 3 遺構

確認できた遺構は、木柱根を残す掘立柱建物跡（SB）2、土器溜まりとした溝状遺構1、土坑・ピット（P）27、方形周溝状遺構（SX）1などがあり、方形周溝状遺構はさらに溝やピットを持つ。

土器溜まりやⅦB-P1は、包含層においてやや大きな土師器片が集中して出土した範囲のほぼ直下からの検出である。そのことから、包含層で遺物がまとまって出土した範囲には、地山面において遺構の確認はされなかったが土坑などがあった可能性がある。

### (1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第5図） ⅢC・ⅣCに位置する。ⅢC-P1（8d：位置する小グリッドの名称。以下同じ）、ⅢC-P4（9f）、ⅢC-P8（10c）、ⅣC-P2（1e）の4基の柱穴による4.9m×3.8mの1間×1間の掘立柱建物跡と推定される。長軸は北東-南西方向である。

4基のピットのうち3基には木柱根が残っていた。ⅢC-P8とⅣC-P2の木柱は、Ⅱ層の砂の除去時に包含層の上に50cmほど突き出した状態で検出した。また、周辺の包含層の上面において、直径20～35cmの円形のピット6基を確認したので、ピット周辺の包含層と地山を断ち割り、木柱の入り方などを確認しながら発掘した。それによりⅢC-P4にも木柱が残っているのを確認した。ピットは円形または楕円形で、地山面からの深さが32～54cm、根固めの石はなかった。木柱は3本ともやや楕円形の円柱である。包含層上面で計測したピットの規模及び木柱の大きさは以下のとおりである。

ⅢC-P1	直径41cmの円形、深さ58cm、木柱：なし
ⅢC-P4	70×33cmの楕円形、深さ79cm、木柱：径19×16cm、長さ70cm
ⅢC-P8	41×32cmの楕円形、深さ84cm、木柱：径20×18cm、長さ1m45cm
ⅣC-P2	47×23cmの楕円形、深さ69cm、木柱：径16×12cm、長さ1m60cm

4基のピット全てが上部を北西方向に傾かせている。木柱がないⅢC-P1も傾いていることから、洪水による影響か、地震による影響の可能性はある。

ⅢC-P8からは内面黒色処理のものも含む土師器片が出土したがいずれも細片で、時期は不明である。ほかの3基のピットからは木柱以外に遺物は出土していない。

第2号掘立柱建物跡（第6図） III B・Cに位置する。III B - P 5（4 i）、III B - P 6（5 i）、III C - P 9（4 a）、III C - P 10（5 a）の4基からなる3.8m×2.5mの1間×1間の掘立柱建物跡と推定される。長軸の方向は北 - 南方向である。

III B・Cにおける遺構発掘時に、木柱根を伴うピット3基と伴わないピット1基が、建物の柱穴のように並んでいた。ピットは直径20～45cmの円形または楕円形で、深さ26～54cm、木柱の直径は約15cmである。ピットからは木柱以外の遺物は出土しなかった。

木柱根を残すピット 2棟の掘立柱建物跡以外に、III B - P 1（2 h）、III B - P 2（2 j）の2基のピットが木柱根を残していた。第1号掘立柱建物跡の木柱根と同様に、II層の除去中に包含層の上に50cmほど突き出た状態で検出した。両者の距離が3.6mと第1号掘立柱建物跡の柱間と近い数字であることから掘立柱建物跡の可能性を考慮して調査を進めたが、周辺には位置関係やピットの規模からも対応するとみられるピットは検出されなかった。III B - P 1は直径20cm、深さ43cm、木柱は16×18cmのやや楕円形の円柱で、長さ1 m 20cmである。III B - P 2は直径40cm、深さ58cm、木柱は20×22cmのやや楕円形の円柱で、長さは1 m 30cmである。断ち割りの結果、第1号掘立柱建物跡の柱穴と同様に、根固めの石はなかった。III B - P 1からは木柱以外に遺物は出土せず、III B - P 2からは土師器の細片が出土した。

また、III B - P 2は木柱根の下から礎板を出土した。礎板は楕円形の平面形で、長いほうの径が木柱と同じ22cmで、腐食によるものか、長辺の片側が少し抉れたような形をしている。木柱の有無に関わらず、III B - P 2以外のピットからの礎板の検出はない。

## (2) 土器溜まり（第6図）

III C - 1・2 h・gに位置する。長さ2.8m、幅30～35cm、深さ15～20cmの溝状遺構である。

包含層発掘中、完形に近い状態のものを含む比較的大きな土師器片がまとまって出土したため、周辺を精査しながら発掘を進めたところ、溝状遺構を検出した。その中に9個体の土師器が入っており、土師器は主に溝状遺構の南半分に偏っていた。出土した土師器は、甕6個（第9図1～6）、有孔鉢1個（7）、器台2個（8・9）で、いずれも古墳時代前期の所産とみられる。

## (3) ピット（第7図）

掘立柱建物跡や木柱の入っていたもの以外でピット番号のついたものは25あるが、包含層土の落ち込みがあっても、形態・規模や遺物がないことなどから遺構とせずにピット番号をつけなかったものもある。なお、ピット番号は大グリッドごとに通し番号をつけた。ここでは、図示したものについて述べる。

II A - P 1 II A - 2 iにある。やや不整形な楕円形で1.62m×1.08m、深さ30cmである。土師器片を出土したが、いずれも細片である。

IV A - P 1 IV A - 2 hにある。円形の平面形で直径2.4m、深さ55cm。底面に広葉樹の葉を敷いたようになっていた（平面図破線の範囲）が、その用途は不明である。弥生土器片または土師器片を出土した。

VI A - P 1 VI A - 7・8 h・iにある。約2.6m×約1.3mの範囲に不整形に広がり、深さは13cm。弥生土器片（10）を少量出土した。

VI A - P 3 VI A - 5 fにある。平面形は平行四辺形で1.56m×88cm、深さ23cm。胎土から弥生土器とみられる土器片と剥片を出土した。

VI A - P 4 VI A - 3 fにある。やや不整形な楕円形で1.89m×1.15m、深さ25cm。第9図11～13などの弥生土器片や剥片を出土した。

VIC - P 1 VIC - 4 cにあるが、発掘調査のための排水溝により南側が削平されている。残存部の平

面形は三角形で東西1m、南北32cmで、深さ22cm。甕の口縁部を含む土師器片を出土した。

VII B - P 1 VII B - 5 h・iにある。1.2m×1.5mの楕円形。包含層からで比較的大きな土師器片がまとまって出土し、遺構確認面のレベルまで掘り下げたところ、まとまった土師器片の範囲の直下からピットを検出した。遺構確認面からの深さは20cm。二重口縁壺(14)などを含む古墳時代前期と思われる土師器片、材の形を残す炭化材、炭化米を出土した。炭化材は組んで並べたような出土状況の部分もあった。

#### (4) 方形周溝状遺構(第8図)

V A・Bにあり、東西約15m×南北約15mの方形状の高まりの周囲に不整形な幅2~5mの溝が廻っている遺構で、その形状から「方形周溝状遺構」と呼称し、略称については「SX」とした。

II層の砂の除去中に、III層の上面において円形または隅丸方形に周溝が廻っているかのような状態で砂が堆積しているのを確認し、周溝部分の砂を除去した時点で10cmコンタの測量を行った。周溝とそれに囲まれた平坦面とがあり、その平坦面において、同じ主軸方向に幅15~20cmほどの溝のように黒色土が方形に廻っているのが確認できた。その方形の溝に囲まれた部分を「平坦面内」(略称A区。以下同じ)、方形の溝状の部分を「方形溝」(B区)、方形溝の外側の平坦部分を「平坦面外」(C区)、平坦面から周溝に落ちていく「斜面」(D区)、周溝(E区)と区分した。また、調査を進める際にはグリッドの南北の線を基準に放射線状に8区に分割し、北北東にあたる区画を1区として、時計回りに2区、3区…とし、例えば「3区の周溝」は「SX-3E」と表記することとした。出土遺物の注記にもこの表記を用いた。

SXの範囲内では7基のピットを検出した。SX-P1・P2は包含層上面で確認されたピットで、II層の砂が覆土として入り、地山まで達しない浅いものであった。P1からは内面黒色処理土師器の坏が出土した。残りの5基はA区の地山面における検出で、P3・P4・P5・P6はA区とおおむね同じ軸方向となる4.7m×4.6mの方形のほぼ四隅にそれぞれ配される。4基のピットは円形で、P3:直径25cm、深さ32cm、P4:直径30cm、深さ21cm、P5:直径20cm、深さ12cm、P6:直径30cm、深さ30cmである。P7はA区の東辺の中央付近で検出した直径40cmのピットである。

A区のほぼ中央の位置に炭化物を多く含む層が3cmほどの厚さで径30cmほどの範囲に広がっていたが、焼土は確認できなかった。A区の土師器は2区・3区から多く出土し、5区からもやや多く出土した。

B区の方形溝は、遺構確認時には溝が地山面まで達していると推測して名称を設定したが、実際にはA区とした明褐色土の下に堆積する腐植土(黒色土)の一部であった。「B区」を平面的位置の名称としてそのまま発掘を進めたが、地山面に達したところで、地山土よりごくわずかに黒色がかかった土が溝状に入っているのが確認できた。1・2区で溝の幅が不明瞭になり、北辺が一部切れる。B区では5区で土師器が多く出土する傾向があった。

C区とした範囲はA・B区に比べて遺物の出土がやや希薄であり、さらに、C区の土が黒褐色土と地山土が混ざったものと地山土との互層状をなしており、周溝を掘削した土による盛土と考えられる。C区でも5区から土師器が多く出土する傾向があった。

D区は斜面の部分であり、E区との境界がやや不明瞭となった。D・E区は遺物の出土状況に偏りがあり、東部(2・3区)と南西部(5区)で土師器片が大量に出土した。SXの周溝から出土した土器は、鉢などの小ぶりなものでは器形を残すものもあったが、甕、壺などは、口縁部をよく残した二重口縁壺(第9図20、写真5)などもあるが、ほとんどが破片であった。

遺構完掘時のSXの規模は、全長23.0m×21.6m、周溝の幅1.2~5.2m、最深23cm、平坦面の規模14.8m×14.1m、方形溝の範囲9.1m×9.0m、方形溝の幅10~180cmである。

## 4 遺物

出土遺物の大半は古墳時代前期とみられる土師器であるが、弥生時代中期から後期のものとみられる土器片や、石鏃、砥石などの石器類、管玉、棗玉といった玉類も出土している。包含層に近いⅡ層の中から内面黒色処理の坏類の破片や、須恵器、珠洲焼、中世陶磁器の破片も少量出土している。

出土遺物の多くは包含層出土であるが、復元可能な一括土器の状態出土するものと、接合の可能性が低い土師器片がややまとまった状態で出土するものがあったが、人為的なものによる偏りであるかは不明である。土器溜まりやⅦB - P 1のように包含層で土師器片がまとまって出土した範囲の下から遺構を確認した例もあり、遺構を検出できずに包含層出土となっているものもあると考えられる。

遺構からの出土では、ピットや土器溜まりからの出土のほかに、方形周溝状遺構の特に東側の周溝から土師器片が集中して出土した。

### (1) 弥生土器

弥生土器は、中期から後期とみられる破片が、重量にして約40kg出土している。器形を復元できるものはほとんどない。ⅥA・Bにやや偏在する傾向があり、調査区西半域ではほとんど出土しない。

10はⅥA - P 1からの出土で、器種は不明。粘土粒貼り付け後、細い沈線により渦文や横方向の直線文様が描かれている。山草荷式系とみられる。

11～13はⅥA - P 4から出土した。11は壺の頸部から胴部にかかる部分と思われる。頸部に縄文を施文後、棒状工具で沈線を3本めぐらし、高さの異なる補修孔が2ケある。12・13は同一個体の可能性がある。胴部が円筒状にほぼ直立し、口縁部が外反する。磨耗しているが口唇部に縄文または櫛歯状工具により施文されている。胴部は、上部に波状の櫛描文があり、その下に綾杉状に斜方向の直線が櫛描きされる。櫛歯状工具は4本歯である。13には補修孔1ケが認められる。

15～17は方形周溝状遺構の平坦面部分で出土したもの。15は5B区で出土した甕である。胎土から弥生土器とした。16は甕の口縁部とみられる。口唇部にヘラで刻み目が入る。A区の2区と3区間の土層観察用ベルトから出土。17は甕の体部で、縄文が施文されている。5A区出土。

包含層から出土したものは38～59である。38は山草荷式系の体部片だが器種は不明である。ヘラ状工具により渦文が描かれている。39は小松式系の口縁部で、外反する口縁の内面に櫛描きの綾杉文が施文される。40・41は山草荷式系と思われ、40は4本一組の沈線で連弧文を描き、41は4本一組の横方向直線にとりどころ縦方向の弧線を入れている。

42は甕の口縁部とみられる。口唇部に縄文が施文され、口縁外面は縄文と2本一組の波形の沈線が描かれる。また、頸部には横方向の直線と波状文とが櫛描きされている。43は受け口状になる甕の口縁部で、口縁部外面に縄文と2条の山形の沈線が施される。44は口唇部に細かい刻み目があり、口縁部下の外面に粘土紐を貼り付けて耳を作っている。器種不明。45は甕の口縁部から胴部片で、口唇部に刺突文がある。

46は出土している弥生土器の中では全体の器形がわかるもので、ⅡA - 2h出土の甕である。緩やかにくびれる頸部から口縁部がやや内湾気味に伸びる。平底である。口唇部にヘラ状工具による刺突がある。外面は口縁部付近から胴部下半まで縄文が施文され、口縁部下に横方向に2条の沈線がめぐり、その間に1段の刺突がめぐり、また、頸部付近にも横方向に2条の沈線がめぐり、その間に2段の刺突がめぐり、胴部にはヘラ状工具による山形文が施文されている。

47・48は有段口縁甕の口縁部で、47は段の部分に刺突があり、48は口縁部に擬凹線がある。両者とも内面の段は明瞭ではない。49は受け口状になる甕。50は頸部に横方向の直線と簾状文とを組み合わせた櫛描

き文があり、その下に2本一組の沈線で連弧文を描く。51は口縁部が「く」の字に開く甕。52は縄文施文後にやや太いヘラで入れ子状の方形を描き、ボタン状の粘土を貼り付けている。53は縄文施文後、横方向の平行沈線と山形文の沈線を描く。54は口縁部を折り返している。折り返した外側に連続刺突を櫛描きする。55は天王山式の甕の口縁部とみられ、3本の連弧文がありその上に1本、下に2本の横方向の直線の沈線がある。56は頸部付近に山形文をもち、胴部は櫛描きによる綾杉状の斜方向の直線とその上に2本一組のヘラによる連続刺突がある。57はおそらく甕の胴部片で、捺糸文が施文される。

58・59は土器の底部で1ヶ所の穿孔があることから甌とみられる。胎土から弥生土器と判断した。図示したほかにも、平底に1ヶ所の穿孔をしている土器底部が数点みられた。

## (2) 土師器

古墳時代前期とみられる土師器の機種は、甕、壺、器台、高坏、鉢、蓋などがあり、ミニチュア土器や手捏ね土器も出土している。甕、器台が多く見られるが、高坏は少量である。器台はいわゆる「小型器台」である。出土土器は地元の北陸北東系のものを主体とし、外来系の影響を受けているものも少量ある。ほかに、古墳時代後期とみられる内面黒色処理の坏などが少量みられる。土師器は約300kg出土した。古墳時代前期の土師器と弥生時代後期終末の土器とを誤認しているかもしれない。

**土器溜まり出土** (第9図1～9) 甕(1～6)、有孔鉢(7)、器台(8・9)がある。1は口縁部が「く」の字状に曲がり、口縁部が短い。口縁部外面に1本の沈線をめぐらしている。2・3は口縁部が「く」の字状に外反する。2点とも、胴部外面はハケ調整され、内面はハケ調整やヘラケズリの痕跡がある。底部は上げ底である。4は口縁部が短く、口縁端部を薄めに仕上げている。5は口縁部の外反がやや弱い。口縁端部に面をもつ。6は「く」の字状になる口縁部が上部で強く外反する。口縁端部に面をもつ。胴部の内外面ともにハケ調整で、底部を欠損している。有孔鉢である7は、半球形の器形で丸い底部に円孔が1つある。内外面ともにハケ調整される。8は受部がやや内湾する皿状で、端部を上方につまみ上げている。脚部は直線的に開き4個の透かし穴をもつ。外面は赤彩されている。9は直線的に開く脚部で、残存部で2個の透かし穴がある。受部は直線的に開くものになるとみられる。

**VII B - P 4 出土** (第9図14) 有段口縁壺の口縁部から胴部にかけての部分である。胴部はほぼ球形となる。胴部外面と口縁部から頸部の内面にヘラミガキの痕跡がある。

**方形周溝状遺構出土** (第9図18～第10図37) 周溝出土のものは破片状のものが多く、破碎による廃棄も考慮に入れる必要がある。平坦部出土の土師器は、周溝出土のものとは比較できず復元が可能なものもある。

18は有段口縁壺の口縁部から頸部で、段部は内外面ともに明瞭ではない。19・20は二重口縁壺の口縁部から頸部の部分で畿内系とみられる。内外面ともに赤彩されている。方形周溝状遺構の東側周溝部で出土したが、19は平坦面(8A区)で出土した破片が接合している。20は筒状の頸部に外反する口縁部がつく。20の底部と思われる朱塗りの底部破片も出土したが、胴部は出土していない。21は二重口縁壺の口縁部で、口縁部が大きく開き、口縁端部に面を作っている。22は単口縁の小型壺の口縁部で、わずかに内湾している。外面はヘラミガキ・赤彩されている。23は壺の口縁部とみられる。25は3E区出土で、有段口縁壺の幅広の口縁部外面に、竹管状工具による円形の施文が上下2段にある。頸部から下を欠いている。同一個体となる口縁部片が3A区や3D区からも出土しているが接合しない。26は壺のミニチュア土器で胴部に焼成後の穿孔がある。頸部から上を欠損する。底面は胴部の器壁に比べるとかなり厚い。SX-2E出土。

24・27～33は鉢である。24は口縁部が「く」の字に外反し、鉢の中では口縁が長い。29～32は口縁部を

わずかに外反させる。27は口縁部が直線的に立ち上がる。28・32は小型丸底鉢で、32は口縁部をつまんで外反させている。33はやや偏平な半球形で口縁端部に面をもち、口唇部を外側につまみ出している。

34・35は器台脚部で、35は直線的に延びた脚部の裾部がやや大きく開く。

36・37は内面黒色処理の坏である。2点とも方形周溝状遺構の範囲から出土しているが、Ⅱ層の砂から出土したものである。古墳時代後期のものとみられる。

包含層出土 器種ごとに記載する。

甕(60~69) 成形または焼成の時のゆがみがあり、実測図も左右非対称になるものが多い。口縁部は「く」の字状口縁が主体をなす。外面はハケ調整される。61は口縁端部に面をもち、66は口縁端部を上方につまみ上げる。65は直立気味の胴部に緩やかに外反する口縁部がつくもので、「く」の字口縁にならない。

壺(72) 明確に壺と判断される土師器片は多くない。72は口縁外面に粘土を貼り付けて有段にしている。

高坏(78~80) 坏部のみまたは脚部のみものしかなく、全体の器形をとらえられるものはない。79は口縁部をつまんで外反させている。高坏の坏部としたが鉢の可能性もある。80は高坏脚部で、緩やかに外反しながら開く。

器台(81~85) 完形のもの器高が9~13cmくらいに収まり、いわゆる「小型器台」が多い。受部が皿状のもの(81・82)と段をもつもの(83)とがある。また、84・85は受部が直線的に開くとみられる。脚部に透かし孔をもつものや赤彩されているものが多い。

鉢(70・71、73~77) 70・71・77は口縁部の屈曲が強く、口縁部が長く伸びる。73・74は口縁部の屈曲が緩やかである。75は台付き鉢である。77は内面が丁寧にヘラミガキされている。

蓋(86) つまみがあり、かえりが長い。長頸壺の蓋の可能性はあるが、組み合わせられる遺物は出土していない。内外面ともに赤彩されている。

その他 87は甕形のミニチュア土器で、口縁部内側にヘラ状工具による沈線が1条めぐる。88は手捏ね土器で内面に指頭圧痕を明瞭に残す。89は鉢形のミニチュア土器である。

### (3) 石器類・玉類(第12・13図)

石器は、石鏃などの剥片石器が5点、石錘・磨石といった礫石器が8点、砥石3点が出土し、そのほかに、剥片・石核も出土した。石器は土師器がまとまって出土する範囲よりやや低いところや地山漸移層近くでの出土が多いが、砥石は土師器とほぼ同じレベルかやや高いところで出土した。玉類は管玉4点、棗玉1点が出土した。また、土錘2点が出土した。

石鏃(94~97) 4点とも有茎鏃である。97の先端は折損している。

石錐(98) 1点出土。一方の先端に磨耗がみられる。

石錘(106) 1点出土。偏平な円礫を用い、両端の短辺を打ち欠いて縄掛け部が作られている。また、長辺の一辺にも浅い打ち欠きがある。

磨石(108・109) 2点出土。やや偏平な球形の自然礫を用い、側辺に使用痕がみられる。

凹石(110・111) 4点出土。111は敲石としても使われたようである。

礫(107) VII B - P 1 から出土した礫である。6.5cm×5.1cmの楕円形の平らな面を持つが、用途は不明である。上から3分の1付近で割れているが打ち欠いてあるものではない。

砥石(112~114) 3点出土。113は石材からの切り出し時のものとみられる溝状の工具痕がある。

管玉(99~102) 4点の出土のうち、1点(99)は排土置き場の近くで表採されたものであるが、ほ

かの3点は方形周溝状遺構とその周辺からの出土である。北の周溝覆土から1点、平坦部の立木根の下から検出したSX-P7から1点、南の周溝の外にあたる包含層(VB-10e)から1点出土した。いずれも緑色凝灰岩製で緑色が濃いものと薄いものがある。4点とも2方向からの穿孔とみられる。図示していないが、緑色凝灰岩の剥片や石核も数点出土している。

棗玉(103) 黄色のメノウ製で、長さ1cm、最大径0.7cm、穴の直径は0.2cmである。2方向から穿孔されている。ⅡB-7aで土師器片と同じレベルから出土した。

土錘(104・105) 2点出土。棒に粘土を巻き付けて作られたものとみられる。104はやや長細く、105はほぼ球形である。

#### (4) 木製品

掘立柱建物跡の木柱や礎板などの建築部材や、板材・杭が出土した。ⅢC-P2出土の礎板は脆弱で図示できなかった。

木柱 第1号掘立柱建物跡の柱穴4基のうち3基から、第2号掘立柱建物跡の柱穴4基のうち3基で木柱を確認した。掘立柱建物以外ではⅢB-P1、P2に木柱が1本ずつ入っており、また、詳細な出土位置は不明であるが、Ⅱ層の除去の際にⅢCの包含層上面で2本の木柱が出土した。115~117は第1号掘立柱建物跡の柱穴から出土した木柱で、いずれも丸太材を縦に分割して木の中心部を取り除いた材を、やや楕円形の円柱に仕上げている。表面に面取り加工の工具痕を残す部分もある。木柱の底面は粗くではあるが平らな面になるように加工されていた。なお、図示している実測図は年代測定のため一部切断した後のものである。

板材・杭 118は板材で、ⅣA-2h出土。119は杭状に先端を尖らせてある木材で、断面は方形。ⅦC-6cにおいて、尖らせてあるほうを下に地面に刺さった状態で出土した。

#### (5) その他の遺物

須恵器・珠洲焼(第12図90~93) 須恵器は包含層の上面、または、Ⅱ層から出土しているが、いずれも小片で量は多くなく、全体の器形をつかめるものはない。珠洲焼や中世の陶磁器片も少量出土しているが、Ⅱ層からの出土で、須恵器と同様に全体の器形をつかめるものはない。図示したものは須恵器のみである。90は杯蓋の口縁部で返りがつく。91・92は長頸壺の頸部で、櫛描波状文をもつ。93は甕の胴部片で外面は平行叩き目、内面は同心円叩き目を残す。

炭化米 VC-2・3a、ⅦB-P1で炭化米を検出した。VC-2・3aの炭化米は、朱塗りの高坏脚部(第12図80)や鉢(第11図70)が出土した周辺の精査中に少量確認されたため、周辺の土の水洗を行って検出した。高坏脚部などの周辺の半径約1.5mの範囲の土から合計で約1,150粒の炭化米と、米ではない植物の種子が炭化したもの数粒を検出した。その範囲よりも外の土も水洗を行ったが、炭化米や炭化種子は検出されなかった。ⅦB-P1からの炭化米は遺構発掘途中に確認し、残りの覆土を水洗したところ、合計68粒の炭化米を検出した。検出した炭化米は全て短粒種である。

動植物遺体 包含層において、立木の根と幹の一部、広葉樹の葉などの植物遺体や、甲虫類の羽根などの昆虫遺体を検出した。立木根は23本、さらに倒木らしい樹幹1本を確認し、その多くは調査区の西半からの出土である。立木根の根元部分からはオニグルミの殻が多数出土したが、樹種同定を行っていないため立木根の樹種は不明である。広がって張っている根と同レベルか少し下から土師器片が出土し、また、SX-P7が立木根を除去したことによって確認できたピットであったことなどから、遺跡の時代よりも新しいものとみられる。

遺物観察表

※法量・長さ等の単位はcmである。

弥生土器・土師器

番号	器種	出土位置	法量	胎土	調整等	備考
1	甕	土器溜まり (ⅢC-1g)	口径14.7 高さ19.6	砂・砂礫やや多 海綿骨針、石英	外面ハケ目 内面ヘラケズリ	丸底 外面スス
2	甕	土器溜まり (ⅢC-1g)	口径17.1 底径6.8 高さ15.3	砂・砂礫少量 海綿骨針、石英	外面ハケ目 内面ヘラケズリ	
3	甕	土器溜まり (ⅢC-1g)	口径17.2 底径6.8 高さ13.0	砂やや多 海綿骨針、石英	外面ハケ目	
4	甕	土器溜まり (ⅢC-1g)	口径14.3	砂・砂礫やや多 海綿骨針、石英	外面ハケ目 内面ヘラケズリ	
5	甕	土器溜まり (ⅢC-2h)	口径14.3	砂やや多 石英、海綿骨針	外面ハケ目 内面ヘラケズリ	
6	甕	土器溜まり (ⅢC-1g)	口径20.1	砂・砂礫多量 海綿骨針、石英	内外面ハケ目	
7	有孔鉢	土器溜まり (ⅢC-2g)	口径16.8 高さ10.1 底孔径1.1	砂やや多 海綿骨針、石英	内外面ハケ目	
8	器台	土器溜まり (ⅢC-2g)	口径9.3 脚径12.2 高さ7.1	灰白色 砂少量 海綿骨針	外面赤彩	
9	器台	土器溜まり (ⅢC-2g)	脚径13.2	砂・砂礫多量 海綿骨針、石英	外面・受部 内面赤彩	
10	—	ⅥA-P1		砂少量		
11	壺	ⅥA-P4		砂やや多		
12	甕	ⅥA-P4	口径16.5	砂少量 海綿骨針		
13	甕	ⅥA-P4		砂少量		
14	壺	ⅦB-P1	口径16.6	砂・砂礫やや多 海綿骨針、石英	外面粗い ヘラミガキ	
15	甕	SX-5B	口径14.7	砂・砂礫多量	内外面ハケ目	外面スス
16	甕	SX-ベルト2A		灰白色 砂やや多		
17	甕	SX-5A		砂多量		
18	壺	SX-8E	口径13.4	砂・砂礫やや多 石英、海綿骨針		
19	壺	SX-3Dほか	口径20.6	砂・砂礫少量 石英	内外面赤彩	
20	壺	SX-3Eほか	口径18.8	砂・砂礫少量 海綿骨針、石英	内外面赤彩	
21	壺	SX-4C	口径28.1	灰白色 砂・砂礫少量 海綿骨針、石英	外面横ナア 内面ヘラミガキ	
22	壺	SX-3A	口径9.6	砂少量 海綿骨針、石英	外面ヘラミガ キ、外面・口 縁部内面赤彩	
23	壺	SX-5E ・6E	口径9.3	砂礫少量 海綿骨針、石英		
24	鉢	SX-3D	口径10.5 底径2.0 高さ9.6	砂・砂礫やや多		
25		SX-3E		砂礫やや多		
26	壺	SX-2E	底径2.5	砂・砂礫少量 海綿骨針		ミナア土器 胴部穿孔
27	鉢	SX-ベルト2C	口径11.6 底径4.1 高さ10.0	砂やや多 石英、海綿骨針	外面ハケ目 内面ヘラケズリ	
28	鉢	SX-5B	口径10.0 高さ7.2	砂少量		丸底
29	鉢	SX-3D	口径10.2 底径2.8 高さ7.0	砂やや多 石英、海綿骨針	外面ハケ目	
30	鉢	SX-6E	口径10.0 底径2.0 高さ6.2	砂(細)多量	外面ハケ目 内面指頭圧痕	

番号	器種	出土位置	法量	胎土	調整等	備考
31	鉢	SX-6E	口径10.6 底径4.3 高さ6.6	砂少量 海綿骨針、石英	外面ハケ目 内面指頭圧痕	
32	鉢	SX-5E	口径8.8 高さ6.3	砂(細)やや多 海綿骨針	外面ハケ目 内面ヘラケズリ	丸底
33	鉢	SX-2Cほか	口径18.2 高さ8.0	灰白色 砂少量	外面ハケ目 内面ヘラケズリ	丸底
34	器台	SX-2A	脚径14.8	砂・砂礫多量	外面ヘラミガ キ・赤彩	
35	器台	SX-6C	脚径12.5	砂・砂礫少量 海綿骨針		
36	坏	SX-2Aほか	口径16.2	砂少量	内面ヘラミガ キ・黒色処理	
37	坏	SX-P1	口径13.9 高さ5.5	砂少量	内面ヘラミガ キ・黒色処理 外面赤彩	
38	甕	ⅥA-7i		砂(細)やや多 海綿骨針		
39	甕	ⅥA-8j		砂やや多		
40	—	ⅥA-3e		砂多量		
41	—	ⅣB-10f		砂やや多		
42	甕	ⅣB-4a		砂多量		
43	甕	ⅡB-6e	口径17.9	砂多量		
44	—	ⅥB-5j		砂多量 海綿骨針、石英		
45	甕	ⅥA-3f		砂多量		
46	甕	ⅡA-2h	口径17.3 底径6.6 高さ20.2	砂・砂礫多量		外面スス
47	甕	ⅦB-2cほか		砂少量 海綿骨針、石英		
48	甕	ⅦB-3i		砂多量		
49	甕	ⅥA-10f		砂多量 海綿骨針、石英		
50	甕	ⅣB-8j		砂多量		
51	甕	ⅥA-5h		砂多量		
52	—	ⅥA-3e		砂少量		
53	—	ⅥA-10j		砂やや多		
54	—	ⅥA-5・6f		砂やや多		
55	甕	ⅦD-7b		砂礫やや多 石英		
56	—	ⅥA-3e		砂やや多		
57	甕	ⅥA-5j		砂多量		
58	甕 底部	ⅥA-5h	底径5.8 底孔径0.7	砂多量		
59	甕 底部	ⅦB-7c・ 8b	底径5.7 底孔径0.7	砂礫多量		
60	甕	ⅣA-4h	口径19.4 底径3.7 高さ27.1	砂・砂礫多量	内外面ハケ目	
61	甕	ⅡC-6c	口径18.3 高さ24.9	砂礫やや多 海綿骨針、石英	内外面ハケ目	丸底
62	甕	ⅦC-7h	口径18.7 底径3.5 高さ23.3	砂(細)やや多 海綿骨針、石英	内外面ハケ目	
63	甕	ⅣA-4・5h	口径16.5 底径2.0 高さ24.5	砂・砂礫多量 石英、海綿骨針	内外面ハケ目	
64	甕	ⅢA-2i	口径13.2 底径4.0 高さ16.6	砂・砂礫少量 石英、海綿骨針	外面ハケ目	外面スス
65	甕	ⅢB-6i	口径15.8 高さ16.0	砂・砂礫多量 石英、海綿骨針	内外面ハケ目	丸底 外面スス
66	甕	ⅡA-9i	口径14.5 高さ15.6	砂・砂礫やや多 石英、海綿骨針	外面ハケ目	丸みのある 尖底
67	甕	ⅡB-6a	口径13.5 高さ13.0	砂多量 海綿骨針、石英	外面ハケ目 内面わずかに ハケ目、ヘラ ケズリ	丸底

番号	器種	出土位置	法量	胎土	調整等	備考
68	甕	IV A - 3 h	口径12.5	砂少量 海綿骨針	外面ハケ目 内面ヘラケズリ	丸底か
69	甕	III A - 3 i	口径12.8 底径2.6 高さ11.7	砂・砂礫少量 海綿骨針	外面ハケ目 内面ヘラケズリ、指頭圧痕	
70	鉢	VC - 3 a	口径13.1 底径2.0 高さ11.4	砂・砂礫少量 海綿骨針、石英	外面ヘラミガキ、外面・口縁部内面赤彩	
71	鉢	VII C - 7 d	口径12.0 底径1.8 高さ10.1	砂少量 海綿骨針、石英		
72	壺	III A - 6 h	口径20.8	砂少量		
73	鉢	II A - 4 g	口径18.2 底径 高さ	砂・砂礫少量 海綿骨針	内外面に赤彩の痕跡	
74	有孔鉢	IV A - 4・5 h	口径17.5 底径6.8 高さ9.1	砂礫多量	内外面ハケ目	
75	台付鉢	VI A - 8 h	台裾径9.4	砂・砂礫やや多 海綿骨針、石英	外面ハケ目	
76	鉢	II A - 2 j	口径9.3 高さ7.9	砂礫多量	外面ヘラケズリ、内面指頭圧痕	丸底
77	鉢	II C - 10 i	口径9.1 底径4.0 高さ7.0	砂少量 海綿骨針、石英	内面丁寧なヘラミガキ	
78	高坏 坏部	III B - 6 i	口径22.1	灰白色 砂多量	内外面に赤彩の痕跡	
79	高坏? 坏部	IV B - 2 i	口径9.0	砂やや多	外面赤彩	
80	高坏 脚部	VC - 3 a	脚裾径15.3	砂礫少量 海綿骨針	外面ヘラミガキ・赤彩	
81	器台	IV A - 5 h	口径9.6 脚裾径12.8 高さ8.6	砂やや多 海綿骨針		
82	器台	IA - 7 g	口径13.2 脚裾径12.2 高さ9.6	砂(細) やや多	脚部外面ヘラミガキ、外面・受部内面赤彩	
83	器台	IA - 9 j	口径11.0 脚裾径13.3 高さ9.0	砂礫やや多 海綿骨針	脚部外面・受部内面ヘラミガキ、外面・受部内面赤彩	
84	器台 脚部	III C - 10 g	脚裾径12.9	砂少量 海綿骨針、石英	外面・受部内面赤彩	
85	器台 脚部	IV A - 4 h	脚裾径15.4	砂・砂礫少量 海綿骨針、石英	外面ヘラミガキ・赤彩	
86	蓋	IV B - 3 i IV B - 8 i IV C - 6 b	つまみ径3.6 器径20.0 径10.4 高さ8.3	砂やや多 石英、海綿骨針	内・外面ヘラミガキ・赤彩	
87	甕	III A - 6 g	口径 底径 高さ	砂やや多 海綿骨針、石英		ミニチュア土器
88	手捏ね	III B - 7 f	口径8.2 底径5.4 高さ3.9	砂少量	内面指頭圧痕	
89	手捏ね	IV A - 9 g	口径2.6 底径2.5 高さ1.8	砂・砂礫少量 海綿骨針、石英		ミニチュア土器

#### 須恵器

番号	器種	出土位置	法量	胎土	調整等	備考
90	蓋	II C - 9 h				
91	長頸壺	III C - 1 j			樽描波状文	
92	長頸壺	III C - 1 j			樽描波状文	
93	甕	IV B - 5 c			外面平行叩き目、内面同心円叩き目	

#### 剥片石器

番号	種別	出土位置	長さ	幅	厚さ	石材	備考
94	石鏃	SX - 1 E (VA - 6 g)	2.6	0.9	0.5	流紋岩	
95	石鏃	VI A - 5 i	3.7	1.3	0.5	珪質頁岩	
96	石鏃	VII C - 9 i	2.9	1.6	0.5	珪質頁岩	
97	石鏃	VII A - 1 g	3.2	1.3	0.5	チャート	上下欠損
98	石鏃	VI A - 5 f	4.2	1.0	0.7	珪質頁岩	

#### 玉類

番号	種別	出土位置	長さ	直径	孔径	石材	備考
99	管玉	表採	4.1	1.1	0.4	緑色凝灰岩	
100	管玉	SX - P 7	2.0	0.7	0.2	緑色凝灰岩	
101	管玉	VB - 10 e	2.4	0.8	0.3	緑色凝灰岩	
102	管玉	SX - 1 E	2.4	0.7	0.4	緑色凝灰岩	
103	藁玉	II B - 7 a	1.0	0.7	0.2	メノウ	

#### 土製品

番号	種別	出土位置	長さ	最大径	孔径	備考
104	土錘	VI A - 7 g	3.5	2.8	0.7	
105	土錘	VI B - 1 f	2.7	3.0	0.6	

#### 礫石器

番号	種別	出土位置	長さ	幅	厚さ	石材	備考
106	石鏃	VA - 10 e	9.8	6.7	1.7	安山岩	
107	石器?	VII B - P 1	10.6	6.8	7.5	流紋岩	
108	磨石	VII D - 8 a	10.8	8.3	9.6	安山岩	
109	磨石	VII D - 7 a	5.4	4.8	4.1	安山岩	
110	凹石	VI A - 5 f	8.6	5.5	5.3	安山岩	
111	凹石	SX - ベルト 3 C	11.5	5.8	4.8	凝灰岩	敲石兼用

#### 砥石

番号	種別	出土位置	長さ	幅	厚さ	石材	備考
112	砥石	VI A - 5 i	11.4	3.6	3.6	凝灰岩	
113	砥石	VI A - 7 h	8.7	3.8	2.4	凝灰岩	
114	砥石	II B - 1 i	2.9	1.4	1.9	砂岩	

#### 木製品

番号	種別	出土位置	長さ・直径・幅・厚さ	備考
115	木柱	III C - P 8	長さ145、20×16の楕円形	SB 1
116	木柱	IV C - P 2	長さ160、16×12の楕円形	SB 1
117	木柱	III C - P 4	長さ70、19×16の楕円形	SB 1
118	板材	IV A - 2 h	長さ220、幅13.7、厚さ5.5	
119	杭	VII C - 6 c	長さ420、幅8.1、厚さ9.2	

## 5 まとめ

本遺跡は、平成8年度の確認調査によって所在が確認された推定範囲約2万㎡の遺跡である。確認調査の出土遺物からは古墳時代後期、平安時代、中世の遺跡であるとみられていたが、今回の調査範囲からは古墳時代前期の土師器を中心とした遺物が出土した。遺構・遺物の出土状況から、遺跡範囲が北側の見附市側に広がることも考えられる。

今回の調査は、長岡市内における古墳時代の集落跡としては初めての発掘調査であった。明瞭な竪穴住居跡は検出されなかったが、「方形周溝状遺構」が周溝・周堤を有する大型竪穴住居跡の可能性はある。発掘調査時には周溝墓との見解もあったが、平坦面部分での土師器の出土状況、柱穴のように並ぶピット、ほぼ中央部に存在する炭化物、C区の土の堆積状態などから、A・B区が9.1m×9.0mの隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居の部分となり、C区が周堤、D・E区が周溝と考えられる。また、管玉を数点出土したことや、周溝から破片ではあるが、朱塗りのものも含むまとまった量の土師器を出土した点から、祭祀や集落の中心的人物に関わるものとも考えられる。しかし、竪穴住居が周溝や周堤をもつ理由が、遺構の性格によるものであるのか、立地条件など別の理由によるものであるのかといった問題もあり、今後の資料の増加を待ちたい。そのほかの遺構として、掘立柱建物跡2棟、土器溜まり1基などを検出したが、方形周溝状遺構との時期差なども明らかではないので、集落の構成については今後の調査に期待したい。

出土遺物の主体をなす土師器は、北陸北東部系の土器を中心としているが、外来系の影響がみられる土器も少量含まれている。多くの資料が包含層の出土であり、一括資料として捉えられるものが少ないが、小型器台・小型丸底鉢があり、屈折脚をもつ高坏はみられないことなどから、新潟シンポ編年の6～7期（3世紀末～4世紀初頭）に併行すると考えられる。

五斗田遺跡の周辺には2基の方形台状墓をもつ藤ヶ森遺跡、環濠集落の横山遺跡などの弥生時代後～終末期の遺跡があり、五斗田遺跡はそれらに続く時期の集落とみられる。近隣で五斗田遺跡と同時期の首長墓は墳丘墓、周溝墓ともに確認されていないが、五斗田遺跡の南には、新潟シンポ編年8期頃とされる麻生田古墳群1号墳がある。

### 参考文献

- 甘粕健・春日真実 1994 『東日本の古墳の出現』 山川出版社
- 甘粕健ほか 1999 「第3章 弥生時代・古墳時代」 『新潟県の考古学』 高志書院
- 駒形敏朗 1987 『横山遺跡』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗ほか 1999 『藤ヶ森遺跡』 長岡市教育委員会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「越後における古墳出現前後の土器様相」 『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』 「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ
- 長岡市 1992 『長岡市史』資料編1 考古
- 新潟県 1983 『新潟県史』資料編1 原始・古代一考古編
- 新潟県教育委員会 1989 『山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 広井造 1996 「新潟平野南部における古墳時代開始期の一考察」 『考古学と遺跡の保存』 甘粕健先生退官記念論集刊行会

報告書抄録

ふりがな	ごとだいせき							
書名	五斗田遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業に伴う発掘調査							
巻次数								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	鳥居美栄・駒形敏朗・加藤正明							
調査機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2-1 電話番号0258-32-0546							
発行年月日	2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごとだいせき 五斗田遺跡	ながおかし かめざきまち あざごとだ 長岡市亀崎町 字五斗田	15202		37° 29' 06"	138° 55' 40"	1999年 5月25日～ 11月10日	5.400	ほ場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
五斗田遺跡	集落跡	弥生時代後期 古墳時代前期	方形周溝状遺構 1基 掘立柱建物跡 2棟 土器溜まり 1基	弥生土器 土師器 甗 管 石 土 石 石	40kg 300kg 1点 4点 2点 2点 1点 1点	弥生時代から古墳時代にかけてと思われる立木の根及び倒木が出土		

## 附編 微化石分析及び放射年代測定

五斗田遺跡の古環境を明らかにすることを目的として、花粉及び珪藻の微化石分析と放射性炭素による放射年代測定とが実施された。また、放射年代測定は、遺物の年代を決定することもその目的のひとつとしている。

微化石分析試料は、主として発掘に伴って出現した沖積層の露頭から、一部は深掘りによって出現した露頭から採取された。放射年代測定試料は、木柱、炭化材、立木根、流木などである。

なお、地質学的な記載は別に報告されるので、ここでは層序区分を簡単に述べるにとどめる。五斗田遺跡の発掘に伴って出現した沖積層は、上位より、土壌または盛り土と考えられるA層、耕作土であるB層、砂を主体とし一部に亜円礫を含むC層、砂、シルトからなるD層、腐植質粘土層で遺物包含層のE層、砂、シルト、腐植質粘土からなるF層、シルトの円礫を含む砂、シルトからなるG層に区分される。

### (1) 花粉分析

花粉分析試料は、西壁のI A-7i (A地点とする)、北壁のV A-5・6d (B地点とする)、南壁のⅢC区内 (C地点とする) の3箇所から採取された。それらのうち、A及びB地点の試料は、岩相区分を目安として4～22cmの間隔で採取された、それぞれ13点及び18点の試料で、C地点の試料は、D層上部のややシルト質の部分、E層、F層中の泥炭層(第2泥炭層と称す)とその直上の砂質シルト及びG層上部の粘土層(下部粘土層と称す)から2cm間隔で切り出した32試料より選んだ19試料である。

分析試料の総数は50試料で、分析はパリノ・サーヴェイ株式会社によって行われた。分析方法は、試料約10gを水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理の順に物理・化学処理を施して花粉を濃集し、残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数するという方法である。

いずれの地点も花粉・胞子の保存状態は全般に良くなく、とくにA地点ではE層～F層上部で、B地点ではE層～F層で、C地点ではE層下部～F層で定量的分析ができなかった。

A地点の本木花粉は、全体を通じてブナ属・ハンノキ属・クルミ属が卓越し、またスギ属・コナラ属コナラ亜属・トチノキ属なども見られ、最上部でマツ属の優占へと変わる。草本花粉は全体として産出量が少ないが、B層で増加し、マツ属の増加とともにイネ科が優占する。B地点の本木花粉は、D層下部ではハンノキ属の花が多産し、そこから上位に向かってブナ属が優勢になる。C層中部からマツ属の花が増え始め、マツ属が優占する。草本花粉はA地点と同様で、産出量が全般的に少なく、最上部で急激に増加し、イネ科が優占するようになる。C地点の試料は特に花粉の保存状態が悪く、定量分析が行えた試料はD層、E層上部と下部粘土層の一部だけであったが、本木花粉はいずれもハンノキ属・ブナ属が多産し、マツ属・スギ属・クルミ属・コナラ亜属・トチノキ属などが含まれる。草本花粉の産出量は全体的に少なく、D層では比較的多く産出し、イネ科・カヤツリグサ科の花が多産する。

E層以下で花粉化石が少ないことについては、珪藻分析結果と併せて後述する。

D層より上位では、本木類の割合が多くなっていて、花粉組成はブナ属・ハンノキ属を中心としてマツ属・スギ属・クルミ属・コナラ亜属・トチノキ属などからなる。ブナ属はコナラ亜属や、林床のササ類などを伴って冷温帯林を構成することから、当時の後背地にはコナラ亜属などを伴うブナ林が広がっていたと推測される。また、ハンノキ属は沖積低湿地や溪谷沿いの斜面などによく見られ、クルミ属やトチノキ属などと混成することが多い。岩相を見ると砂が卓越していることから河川の影響が強くなり、泥炭の堆

積も見られることから、この時期の低地は湿地化し、植生はハンノキ属を中心としてクルミ属・トチノキ属などを伴う林へと変化したと考えられる。さらに草本類の産出が少ないことから、低地には木本類が繁茂し、居住などの人間活動が営まれなくなった可能性もある。

B層の上部では、木本類はマツ属の、草本類はイネ科の優占に変わっている。マツ属は植林や森林破壊など人間活動の影響が大きい種類である。また、草本類の割合が高くなっていることから、低地では林が減っていったものと考えられる。

以上より本遺跡周辺での植生変遷は、後背地の魚沼丘陵ではブナ属を中心としてコナラ亜属を伴うような冷温帯林が存在していたが、人類の植生干渉に伴い自然林が減少するとともに、マツ属の二次林やマツ属やスギ属の植林が進行したものと推測される。低地ではハンノキ属を中心として、クルミ属やトチノキ属などの湿地林が広がっていたが、稲作などの低湿地利用のために破壊されていったと考えられる。

## (2) 珪藻分析

珪藻分析試料は、C地点から採取した花粉分析試料19試料のうち12試料から得た。

分析はバリノ・サーヴェイ株式会社が実施した。分析方法は次のとおりである。試料7g前後(湿重)を過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集させる。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。

珪藻化石はすべての試料から産出した。化石の保存状態を示す完形殻の出現率は、G層～F層が50%前後、E層～D層が70%前後で、上位ほど化石の保存状態が良い。産出種数は、48属196種である。産出種の特徴は、全般的に淡水生種が優占し、海水生種も30～5%産出する。海水生種とされるものの中には、第三系から産出する絶滅種を含んでいる。海水生種の割合は、下位から上位に向けて減少する。淡水生種の中には、水域に生育する水生珪藻と陸上の好気的環境に耐性のある陸生珪藻がみられる。全般的に水生珪藻が優占し、下部粘土層の下部とE層中部では陸生珪藻が優占する。珪藻化石群集の消長に注目すると、下部粘土層の下部、下部粘土層の上部～E層下部、E層の中部、E層の上部～D層に4区分される。

下部粘土層の下部では、海水浮遊性の*Coscinodiscus marginatus*、*Paralia sulcata*、*Thalassionema nitzschioides*、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い種(A群)である*Navicula mutica*、*Orthoseira roeseana*、*Hantzschia amphioxys*が5～15%産出することを特徴とする。下部粘土層の上部～E層下部での淡水性種の生態的特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種と真+好流水性種が、優占あるいは多産することで、主な産出種は、塩分耐性の高い好塩性の*Rhopaloida gibberula*、好流水性で中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、流水不定性の*Gomphonema parvulum*、陸生珪藻A群の*N. mutica*、*H. amphioxys*が5～10%産出する。E層の中部は陸生珪藻の割合が高いことを特徴とし、主な産出種は、陸生珪藻A群の*N. mutica*が30%と多産し、同じくA群の*H. amphioxys*を伴う。E層の上部～D層は、淡水生種の生態的特徴が下部粘土層の上部～E層下部に近似するが、群集の消長は異なり、好流水性で中～下流性河川指標種群の*A. lanceolata*、流水不定性の*G. parvulum*が15%前後と多産することを特徴とする。

下部粘土層には種の消長は異なるが、海水生種、陸生珪藻、水生珪藻など複数の環境を指標する種が高い割合で混在している。化石の保存状態も悪く、第三系由来と考えられる絶滅種もある。このような異地性種を主体とする混合群集は、洪水などによって短期間に堆積した一過性の堆積物中の珪藻化石群集に近似しており、後背地の第三系が削剥されて本地点に流入したのと考えられる。このような混合群集は、

第2泥炭層や、その直上の砂質シルト層、E層中部においても認められ、同様の堆積環境下で堆積したと考えられる。とくに、E層の中部で陸生珪藻A群が多産するのは、洪水が一時的に治まり陸生珪藻が生育できるような環境になった可能性がある。このような好気的環境では、花粉化石などの微細な有機物は土壤微生物などによって分解・消失してしまったものと考えられる。また、氾濫堆積物などにおいても花粉化石が少ない場合が多い。包含層下位では花粉化石がほとんど産出しなかったが、このような不安定な堆積環境に原因を求めることができるだろう。

E層の中部～D層では化石の保存が良く、得られた珪藻化石は現地性の傾向が強い。ここでは、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多産することから、流水域で堆積した河川堆積物と考えられる。この地層からは花粉化石が多産することから、有機物が分解されにくい嫌気的環境が維持されたと考えられる。

### (3) 放射年代測定

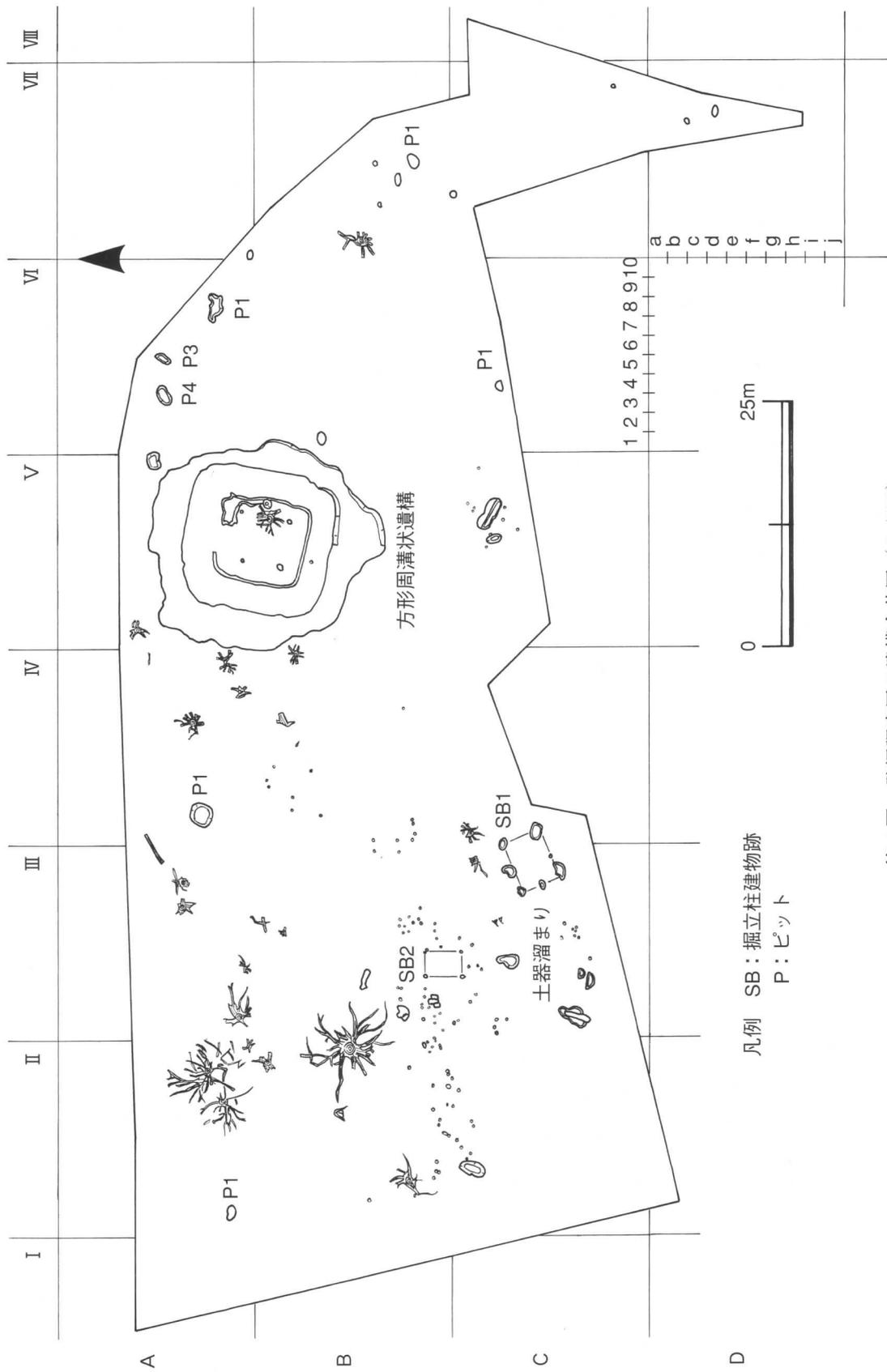
放射性炭素年代測定は20試料について実施された。そのうち発掘調査で出土した遺物や化石は15試料で、それらの測定番号、試料番号、出土・産出グリッド番号、試料の種類、放射性炭素年代 (yBP)、 $\delta^{18}\text{O}$  (‰)、補正放射性炭素年代 (yBP) は以下のとおりである。

1. Beta-139760, 木柱1, III C, 材,  $1580 \pm 60$ ,  $-25.9$ ,  $1560 \pm 60$
2. Beta-139761, 木柱3, III C-P8, 材,  $1510 \pm 60$ ,  $-25.1$ ,  $1510 \pm 60$
3. Beta-139762, 木柱4, IV C-P2, 材,  $1450 \pm 60$ ,  $-24.9$ ,  $1450 \pm 60$
4. Beta-139763, 木柱5, III B-P1, 材,  $1560 \pm 70$ ,  $-28.1$ ,  $1510 \pm 70$
5. Beta-139764, 木柱6, III B-P2, 材,  $1660 \pm 60$ ,  $-26.8$ ,  $1630 \pm 60$
6. Beta-139765, 立木根No4, II C, 材,  $1490 \pm 70$ ,  $-24.1$ ,  $1500 \pm 70$
7. Beta-139766, 立木根No19, VB, 材,  $1510 \pm 50$ ,  $-28.7$ ,  $1450 \pm 50$
8. Beta-139767, 立木根No20, VII B, 材,  $1750 \pm 50$ ,  $-28.1$ ,  $1700 \pm 50$
9. Beta-139768, 倒木, VA・B, 材,  $1720 \pm 50$ ,  $-27.2$ ,  $1690 \pm 50$
10. Beta-152276, 257, II A-9i, 炭化材,  $1670 \pm 60$ ,  $-28.2$ ,  $1620 \pm 60$
11. Beta-152277, 1661, IV B-7a, 炭化材,  $1670 \pm 60$ ,  $-26.8$ ,  $1640 \pm 60$
12. Beta-152278, 2414, VIA-5h, 炭化材,  $1670 \pm 70$ ,  $-25.8$ ,  $1660 \pm 70$
13. Beta-152279, 3238, VII B-p1, 炭化材,  $1720 \pm 60$ ,  $-26.7$ ,  $1690 \pm 60$
14. Beta-152280, 木柱No2, III C, 材,  $1590 \pm 60$ ,  $-26.3$ ,  $1560 \pm 60$
15. Beta-152281, 木柱No7, III C-P4, 材,  $1630 \pm 60$ ,  $-26.4$ ,  $1610 \pm 60$

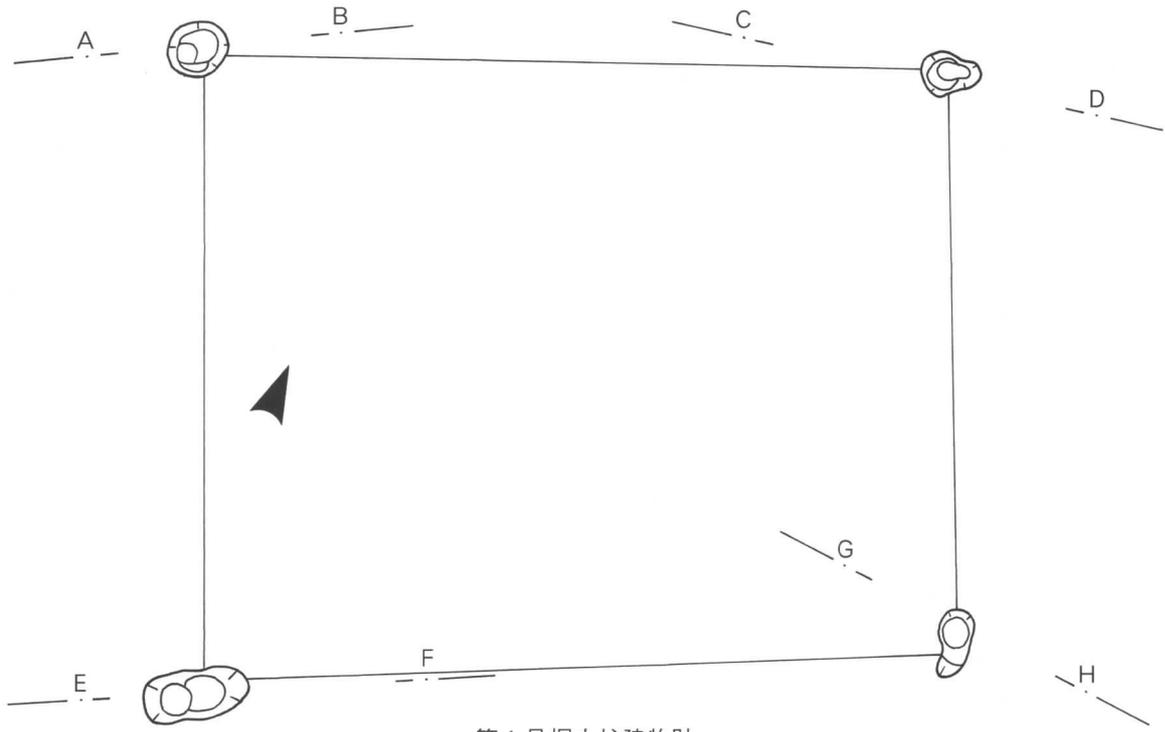
また、地質調査で採取された化石は5試料で、それらの測定番号、試料の種類、産出層、放射性炭素年代 (yBP)、 $\delta^{18}\text{O}$  (‰)、補正放射性炭素年代 (yBP) は以下のとおりである。

16. Beta-152282, 材, E層,  $1720 \pm 60$ ,  $-28.2$ ,  $1670 \pm 60$
17. Beta-152283, 材, F層,  $1860 \pm 60$ ,  $-27.7$ ,  $1820 \pm 60$
18. Beta-152284, 材, G層,  $1830 \pm 70$ ,  $-27.0$ ,  $1800 \pm 70$
19. Beta-152285, 材, C層,  $1580 \pm 50$ ,  $-29.7$ ,  $1500 \pm 50$
20. Beta-152286, オニグルミ堅果, E層,  $1760 \pm 40$ ,  $-28.2$ ,  $1710 \pm 40$

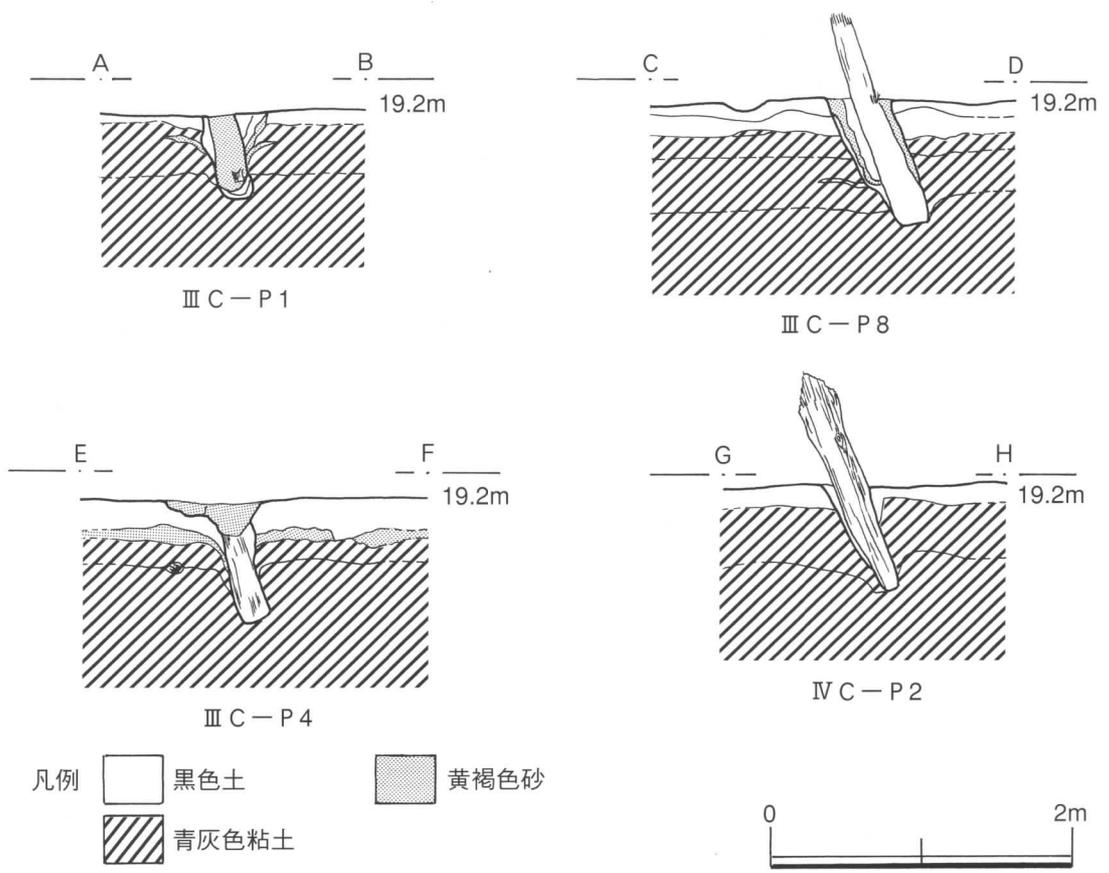
なお、測定受託者は、Beta-139760～68が株式会社パレオ・ラボ、Beta-152276～86が株式会社地球科学研究所である。また測定方法は、Beta-152286のみがAMS法で、その他の19試料は液体シンチレーションカウンタによる $\beta$ 線計数法である。



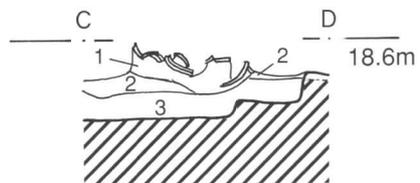
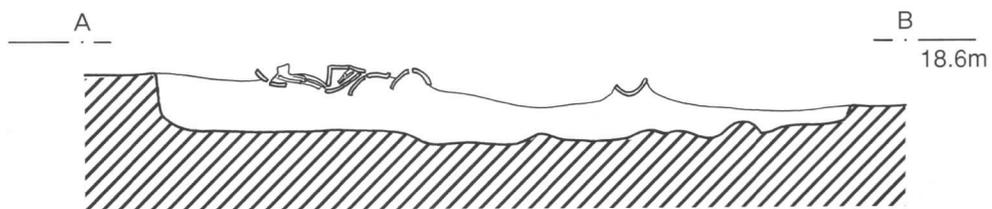
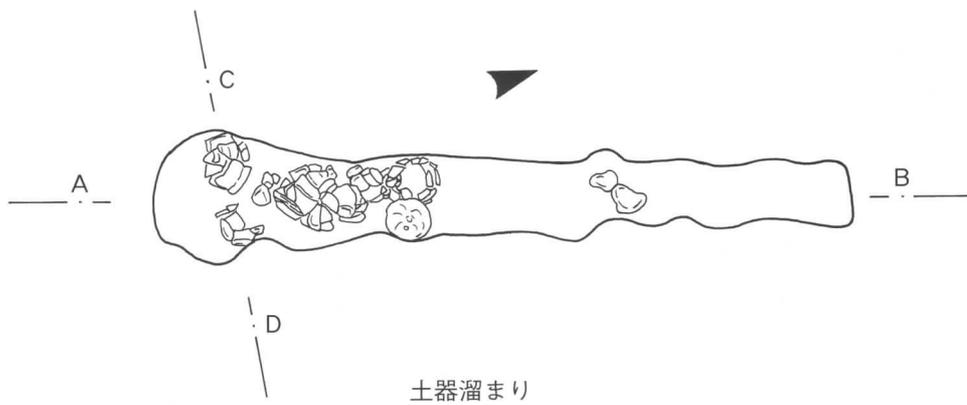
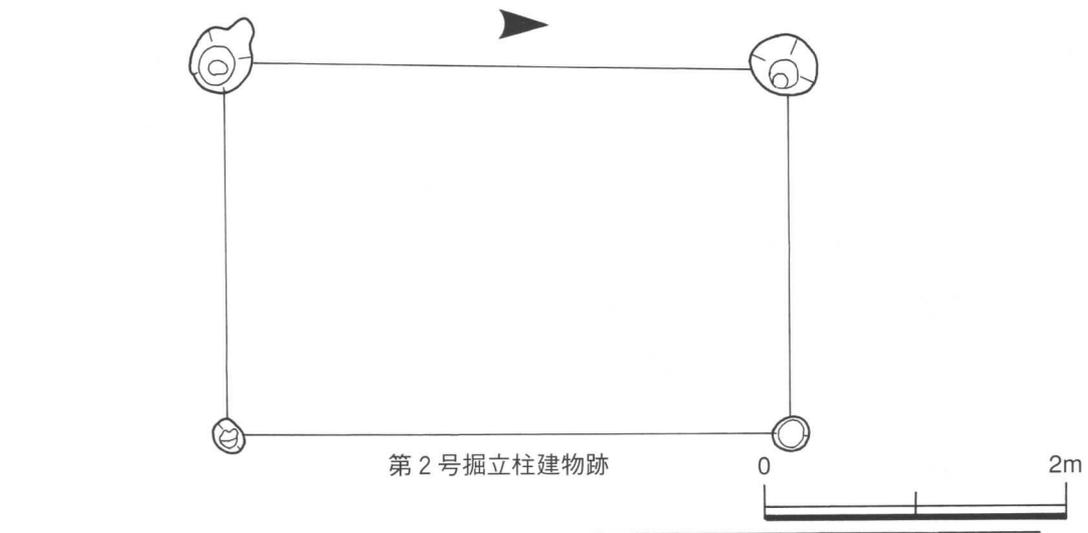
第4図 発掘調査区の遺構全体図 (1/600)



第1号掘立柱建物跡



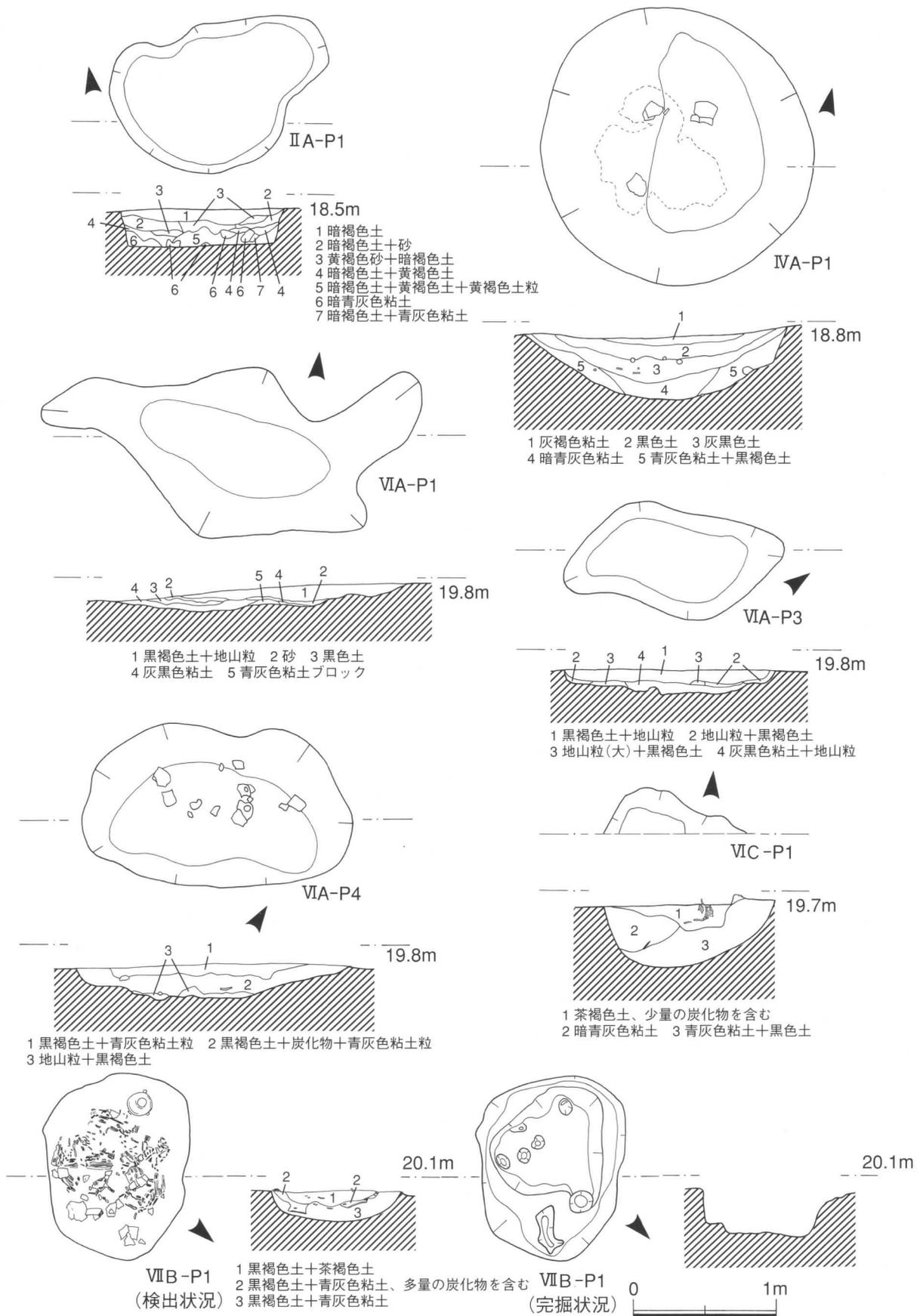
第5图 第1号掘立柱建物跡



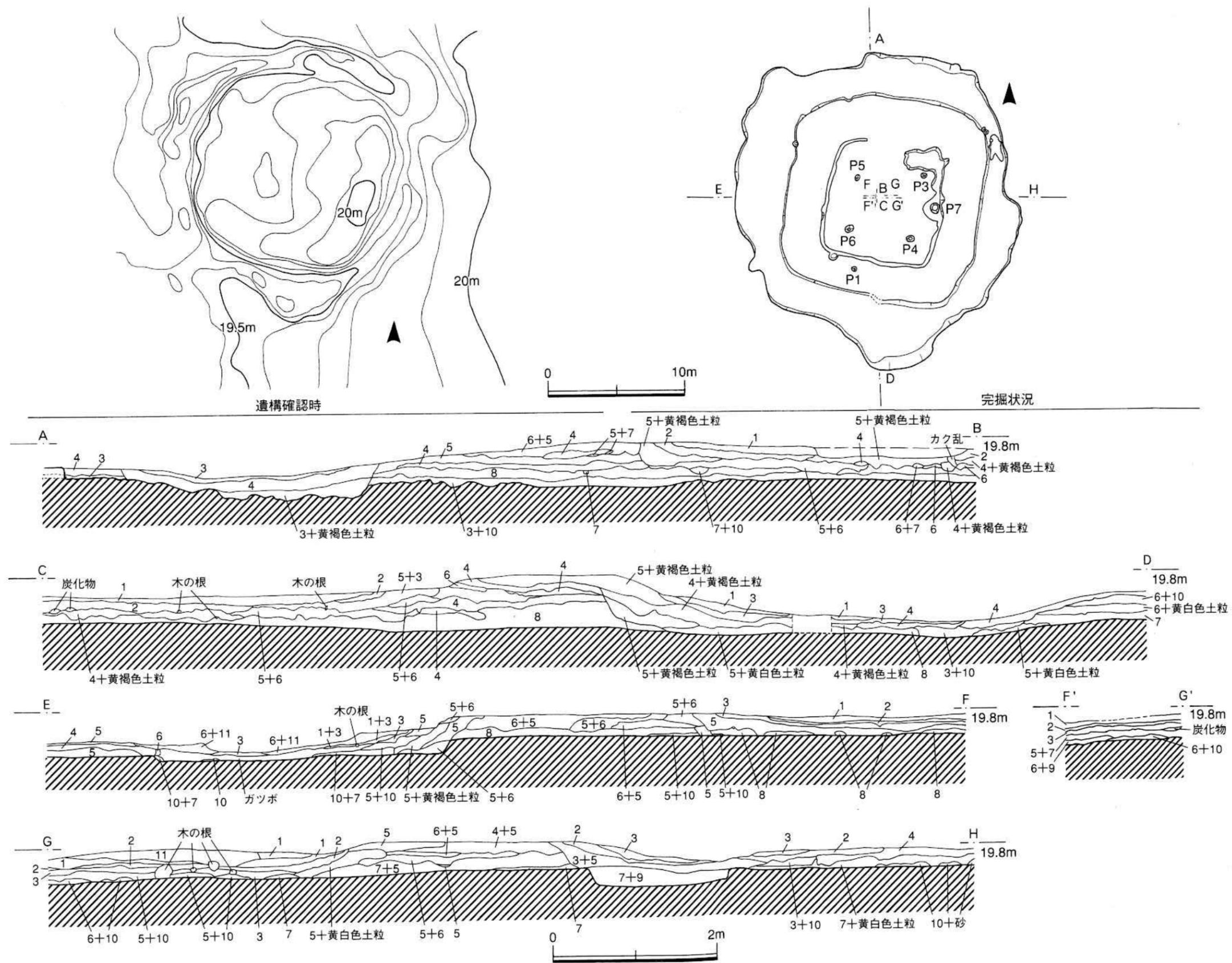
- 1 黒褐色土
- 2 砂を多く含む青灰色粘土
- 3 黒褐色粘土+青灰色粘土



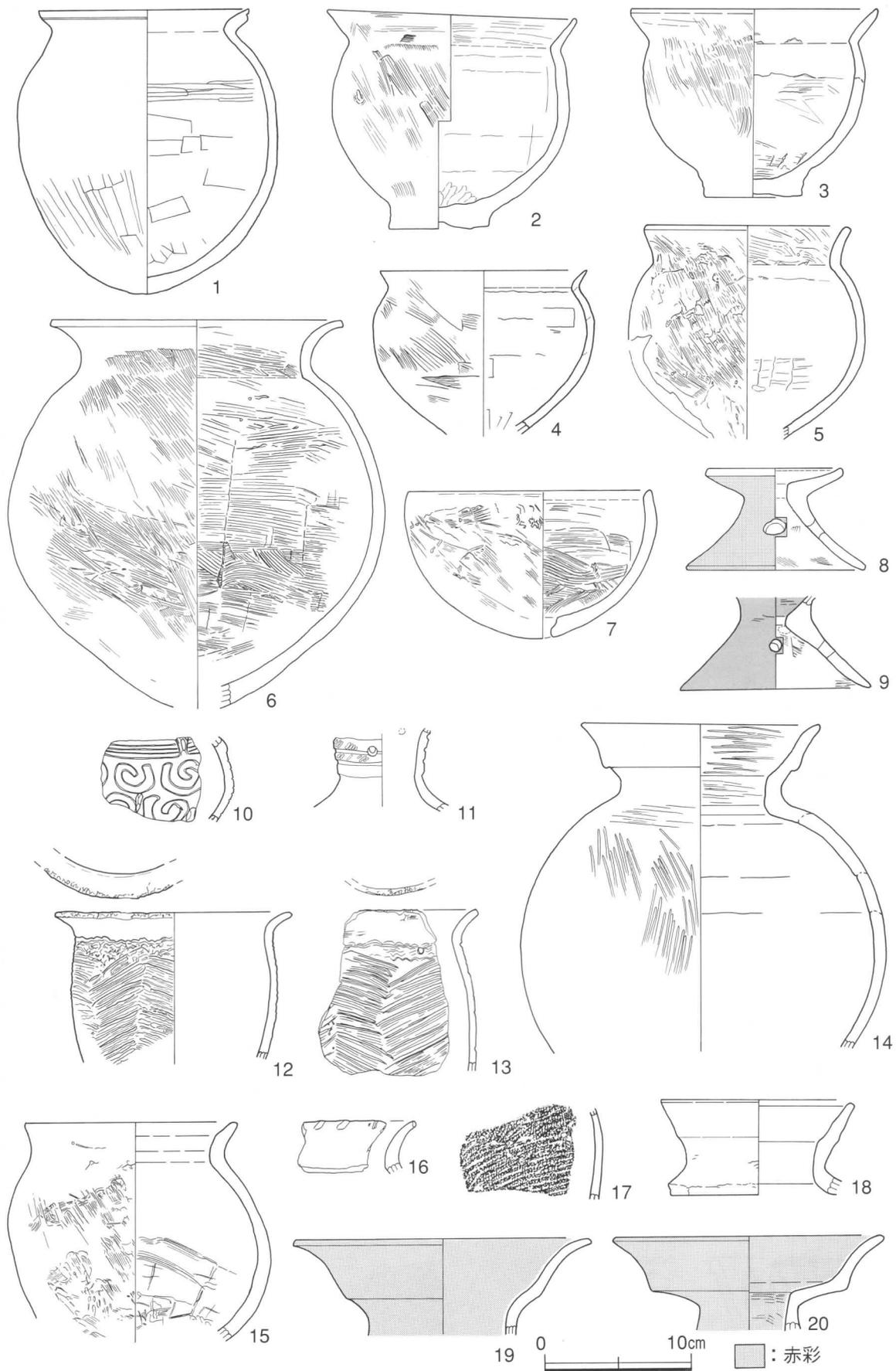
第6図 第2号掘立柱建物跡・土器溜まり



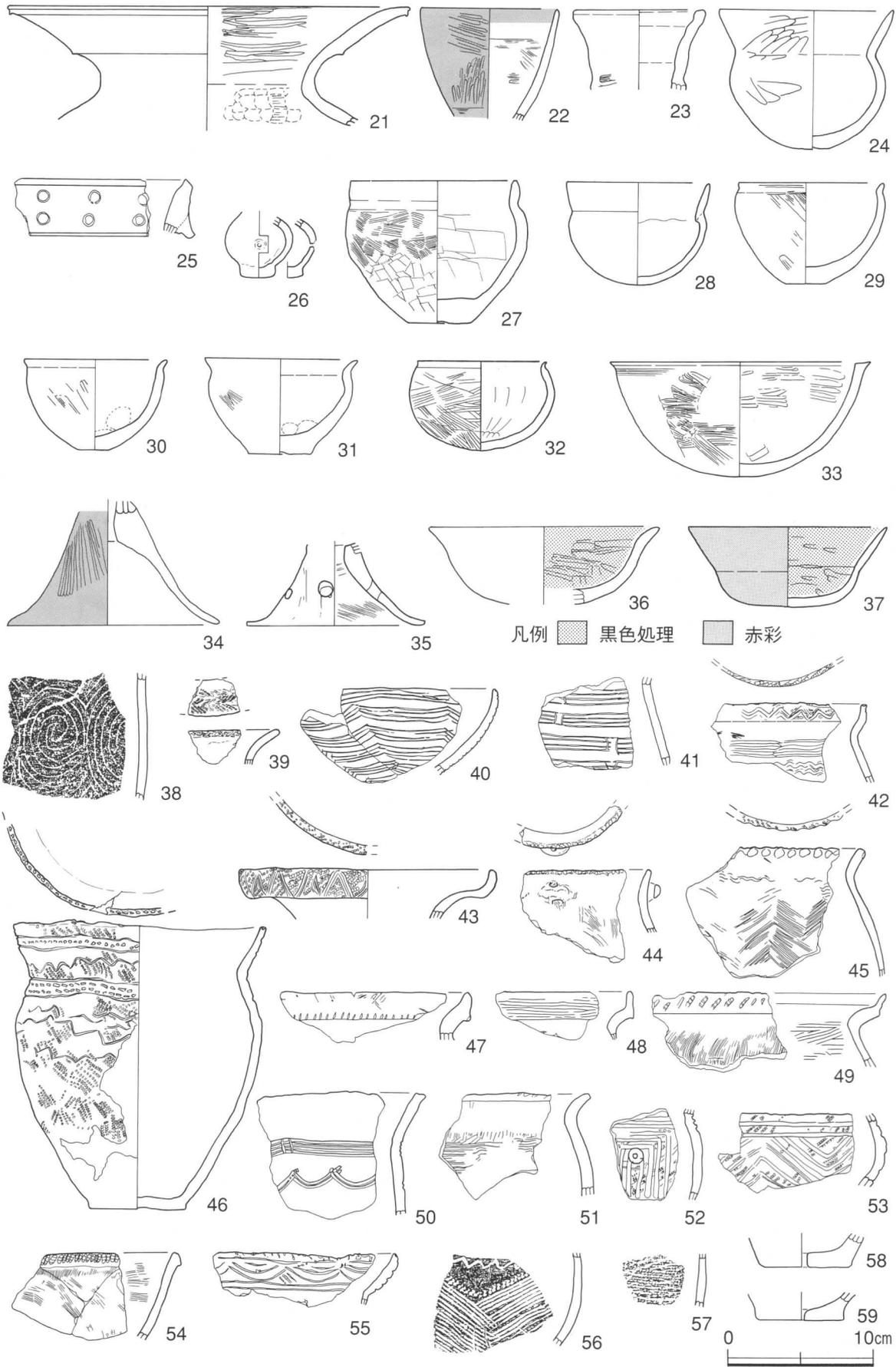
第7図 ピット



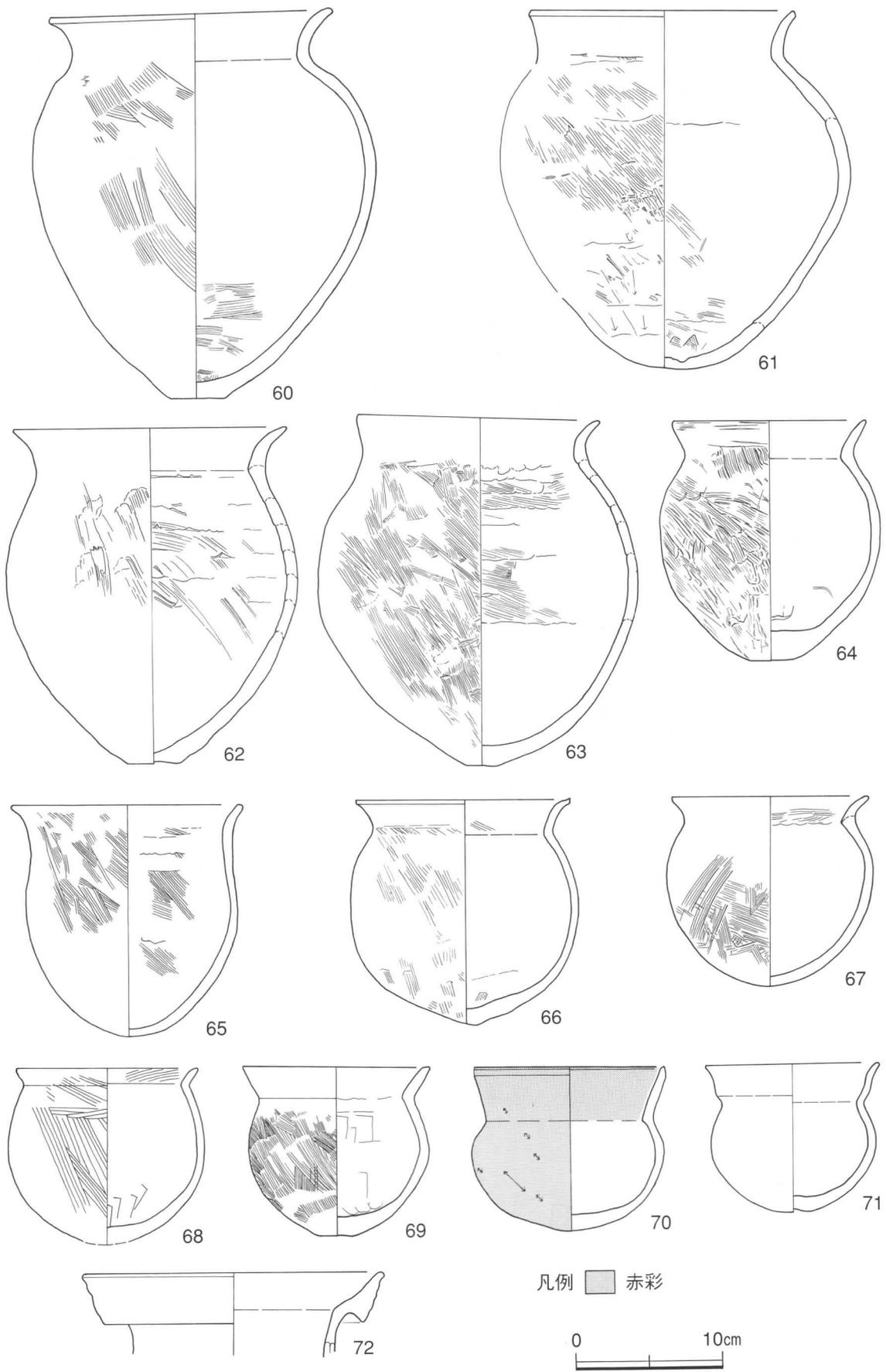
第8図 方形周溝状遺構



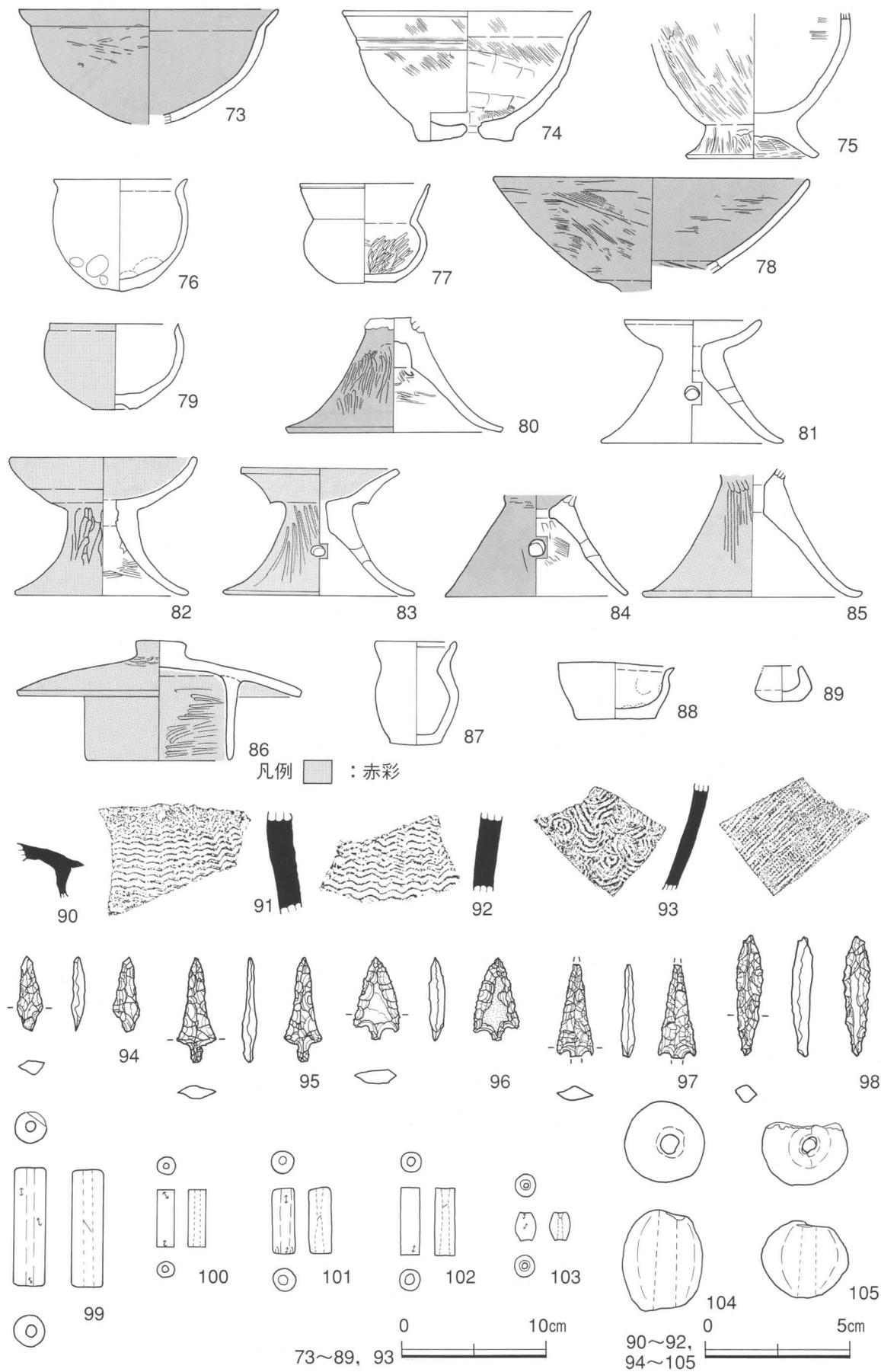
第9図 出土遺物 1



第10图 出土遗物 2



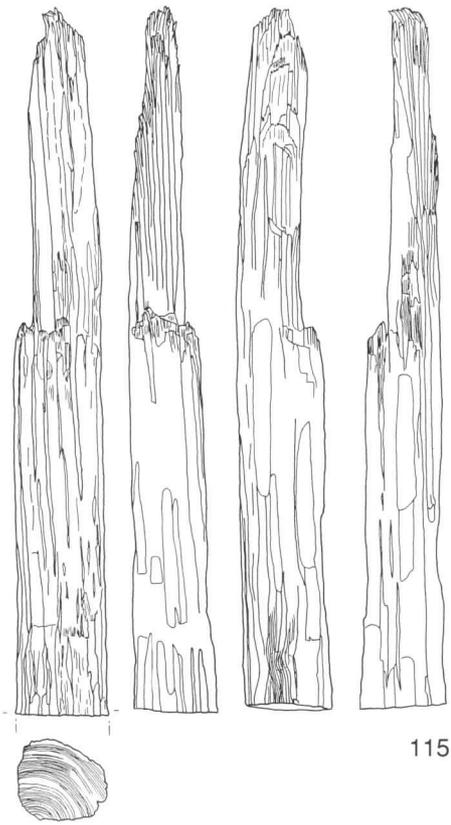
第11图 出土遺物 3



第12図 出土遺物 4



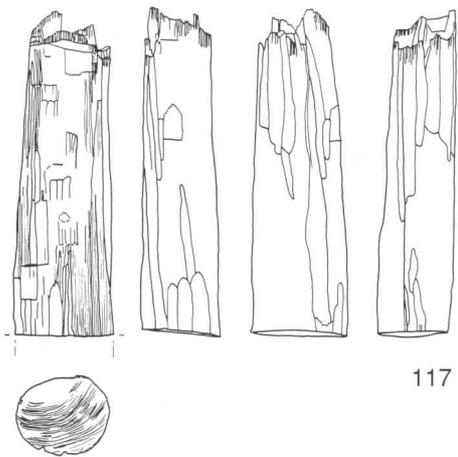
第13图 出土遺物 5



115

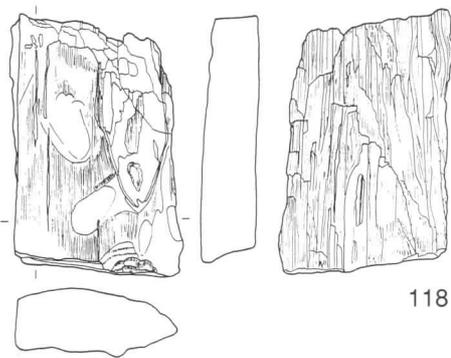


116

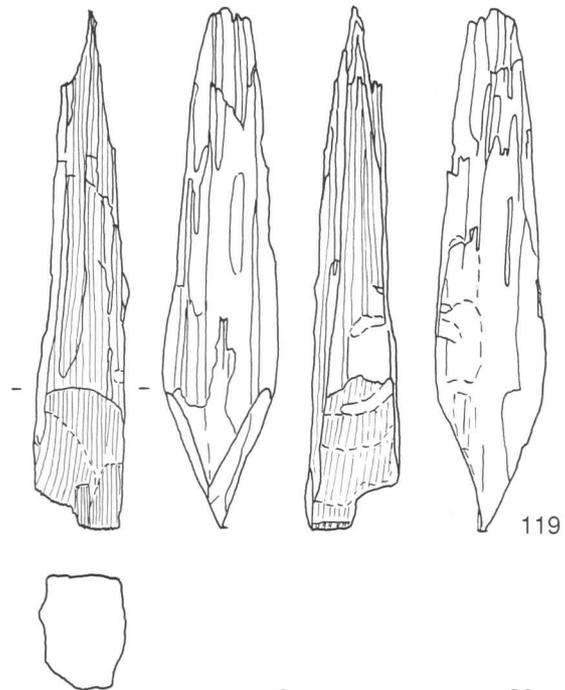


117

115~117: 0 50cm



118



119

118・119: 0 20cm

第14図 出土遺物 6



調査区全景



遠景（南西から）



近景（北から）

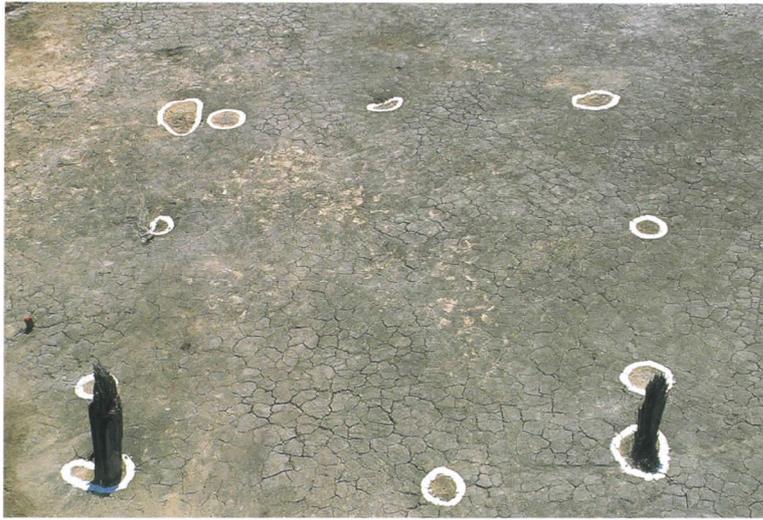


包含層発掘風景



木柱実測風景

写真1 遺跡調査風景



第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡  
木柱No.3 (ⅢC-P8)



第2号掘立柱建物跡

写真2 掘立柱建物跡



検出状況



土師器出土状況



完掘状況

写真3 土器溜まり



VIC-P1 半裁状況



VII B-P1 半裁状況



VII B-P1 完掘状況

写真4 ピット



完掘状況



3区周溝  
壺出土状況



4区平坦面外  
壺出土状況

写真5 方形周溝状遺構



甕 (VIC-7h)



器台 (IA-9j)



砥石・土師器 (VIA-7h)

写真6 遺物出土状況

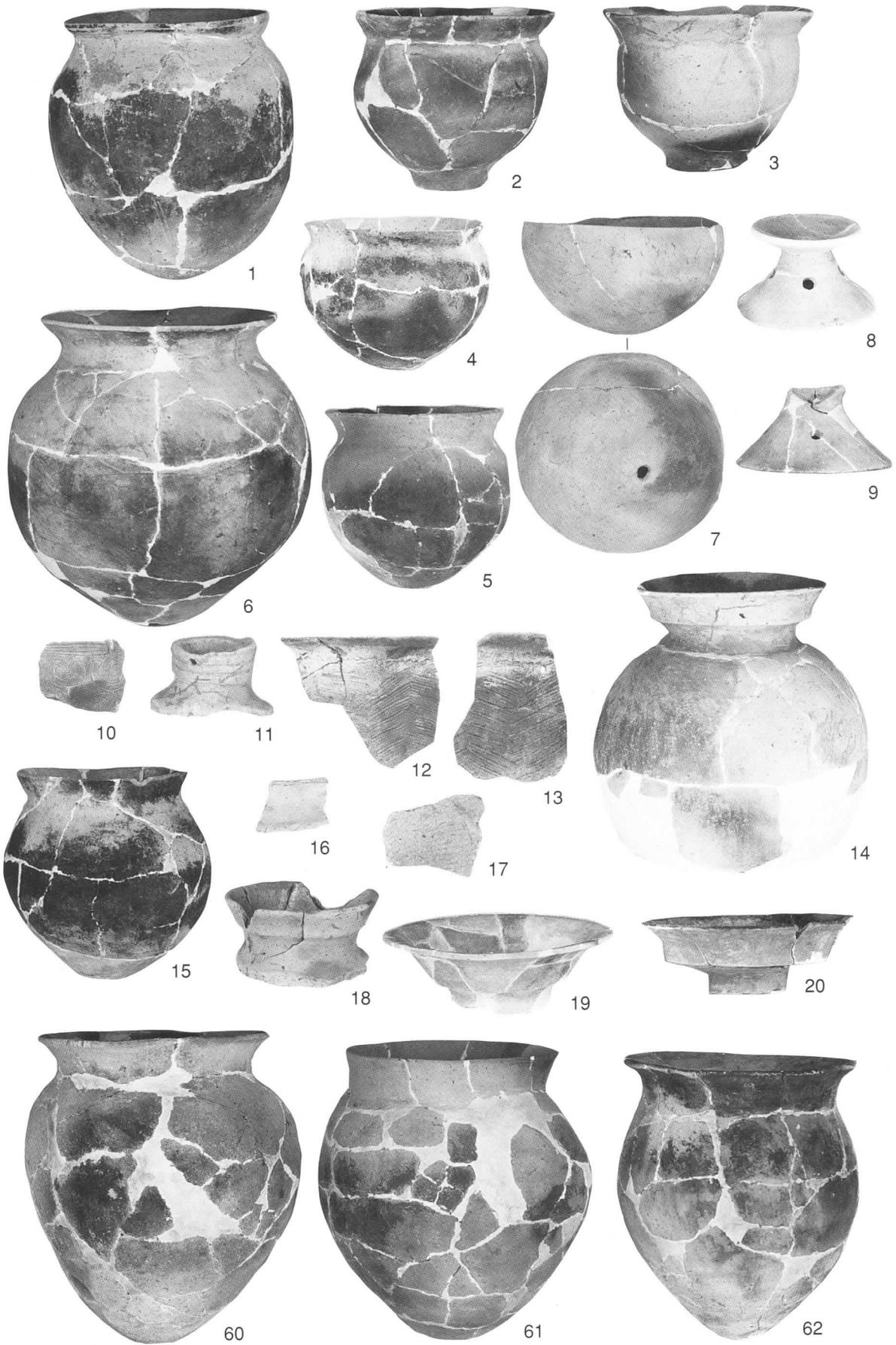


写真7 出土遺物 1

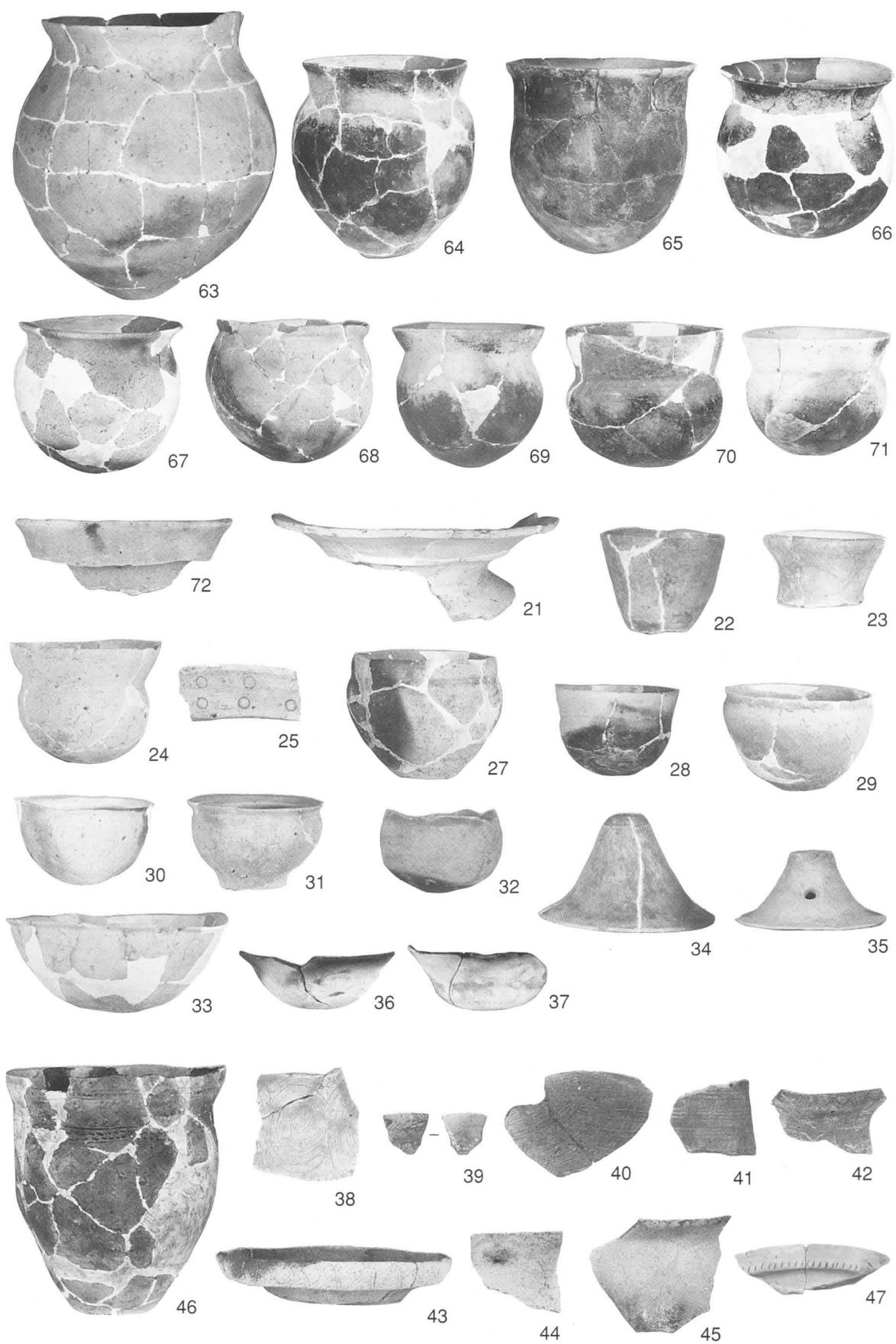


写真8 出土遺物2

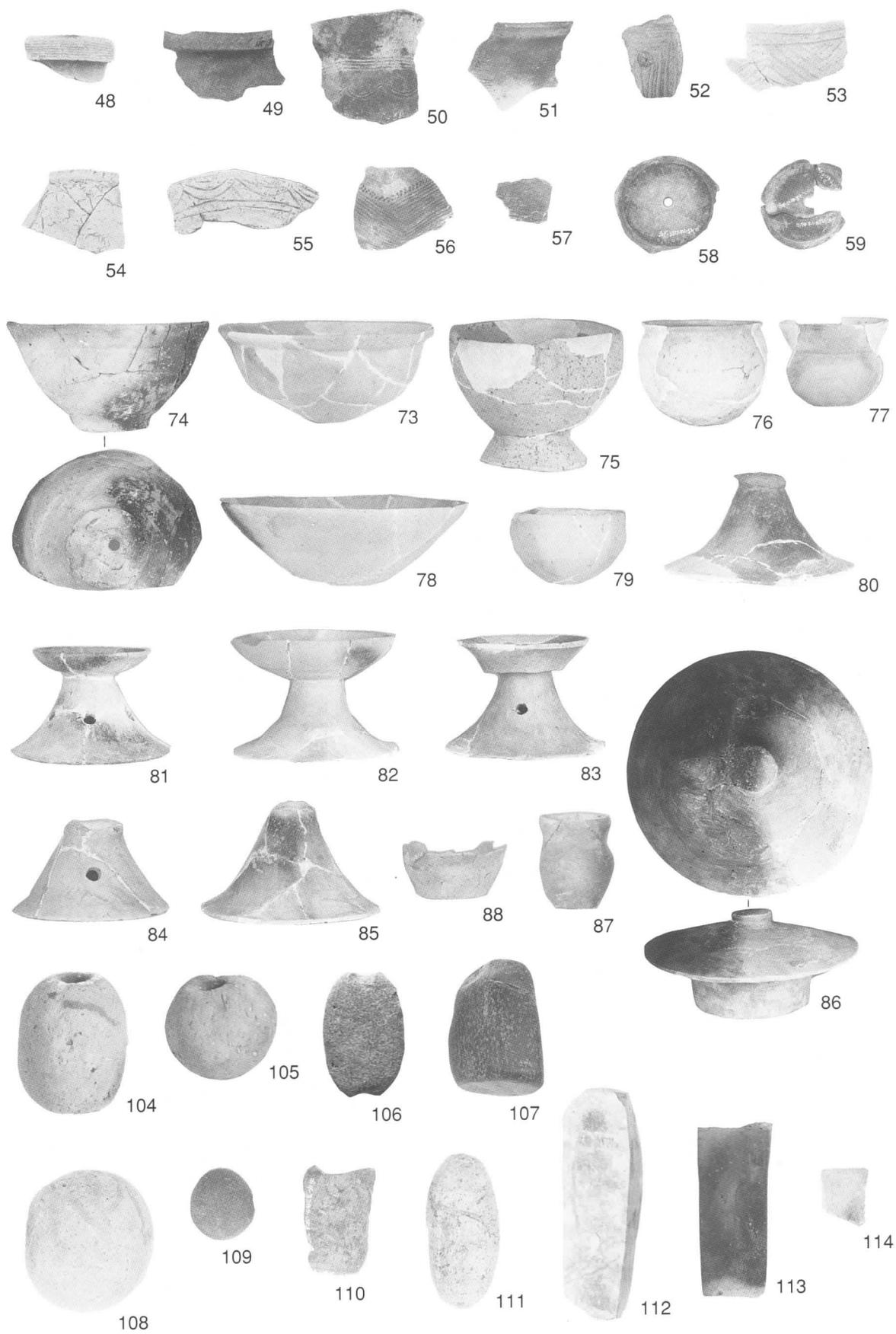


写真9 出土遺物3

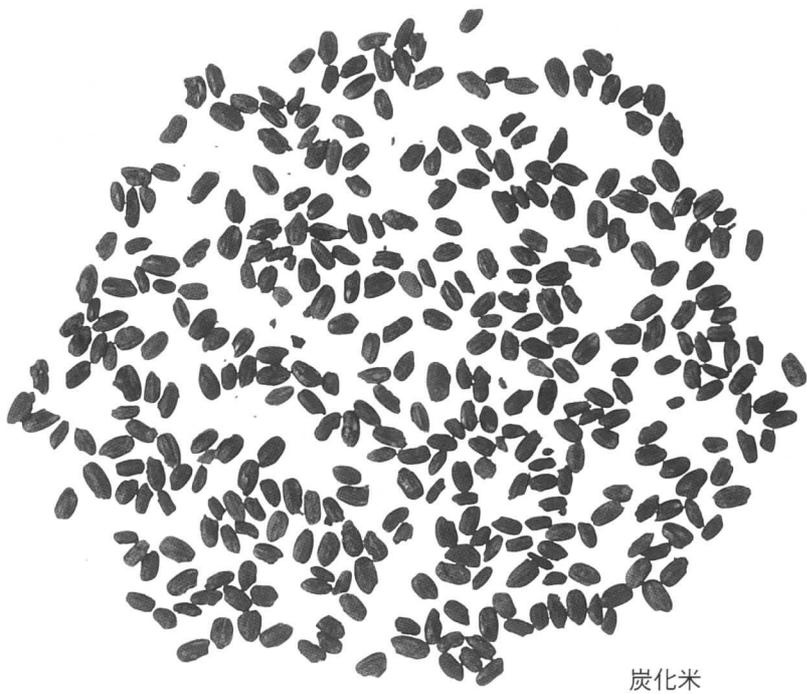
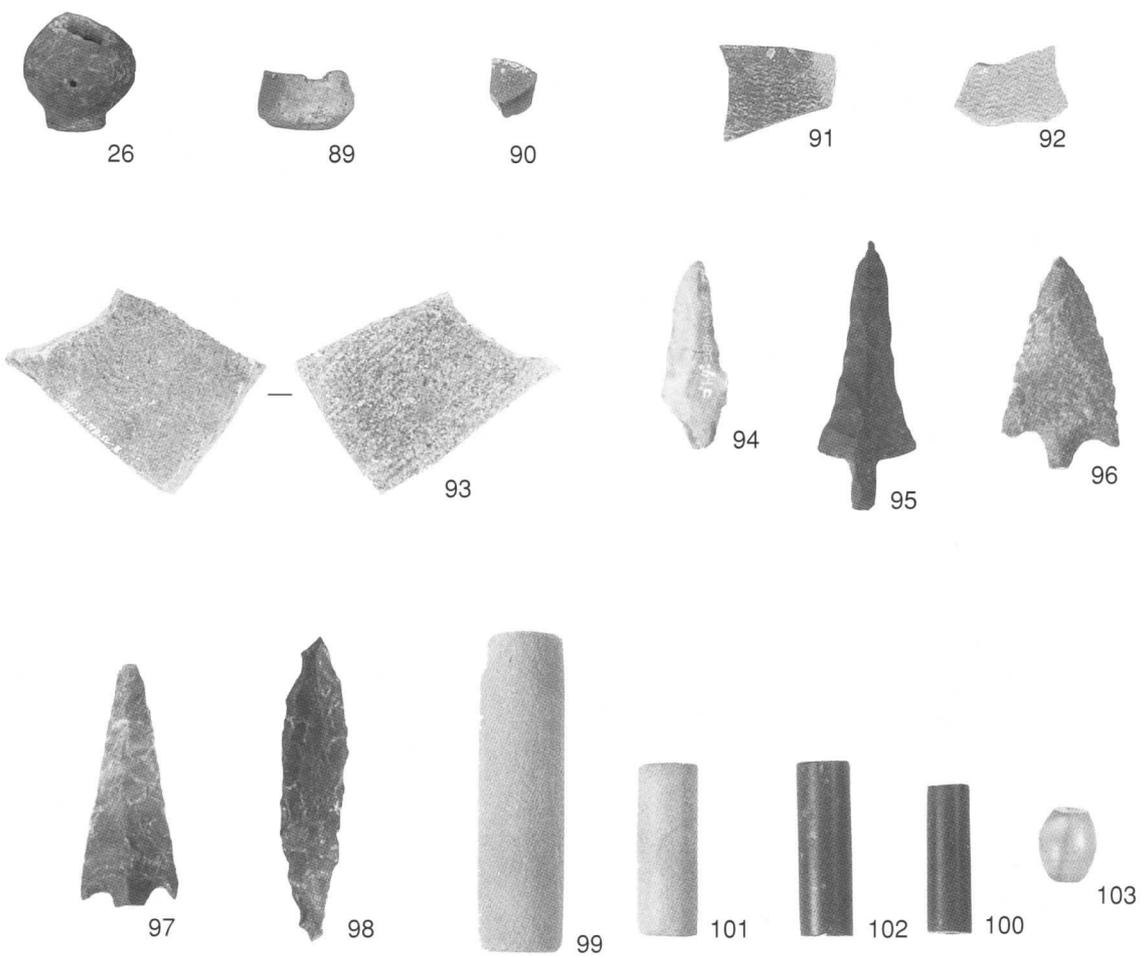
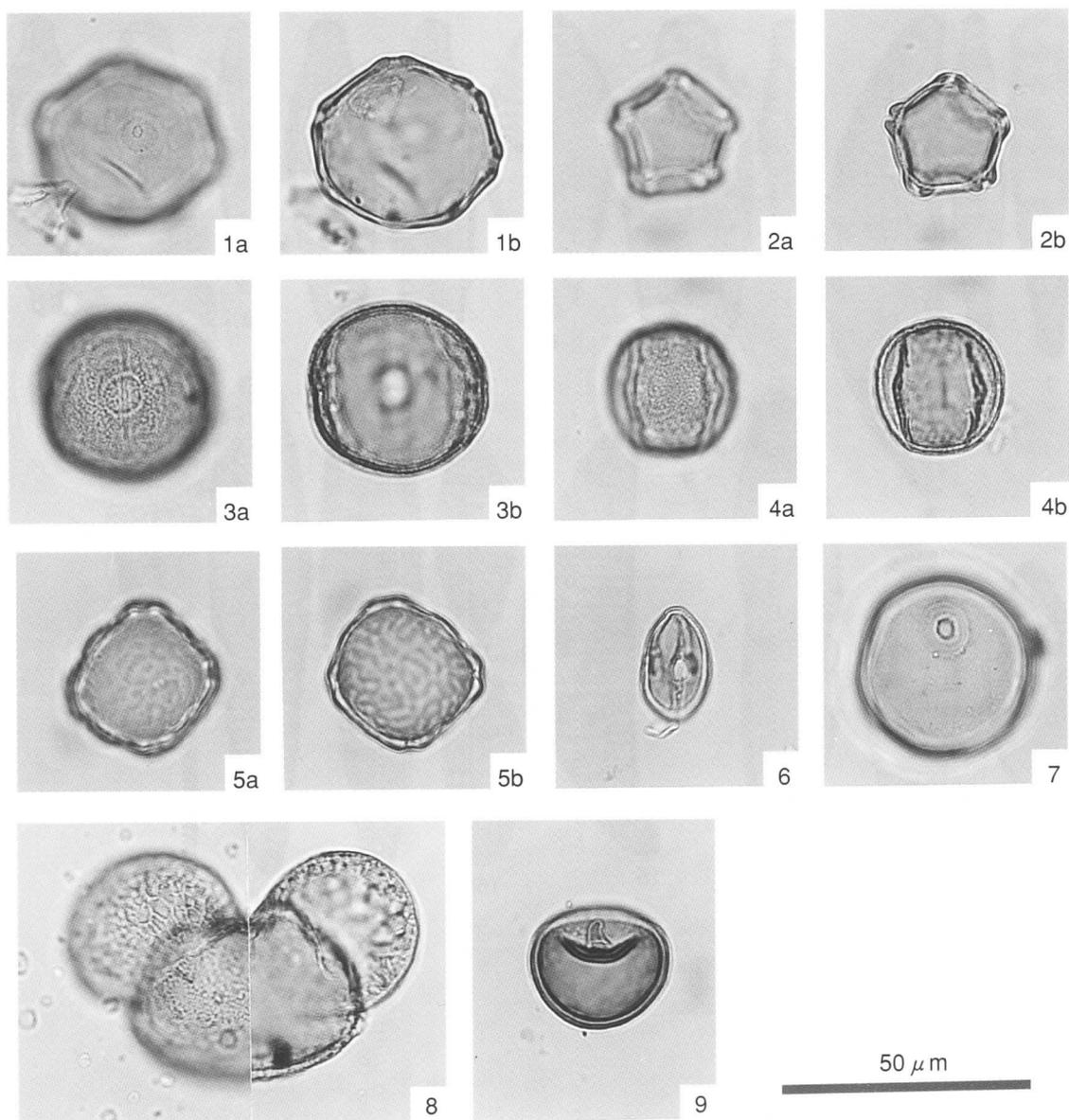


写真10 出土遺物 4



1. クルミ属

3. ブナ属

5. ニレ属-ケヤキ属

7. イネ科

9. スギ属

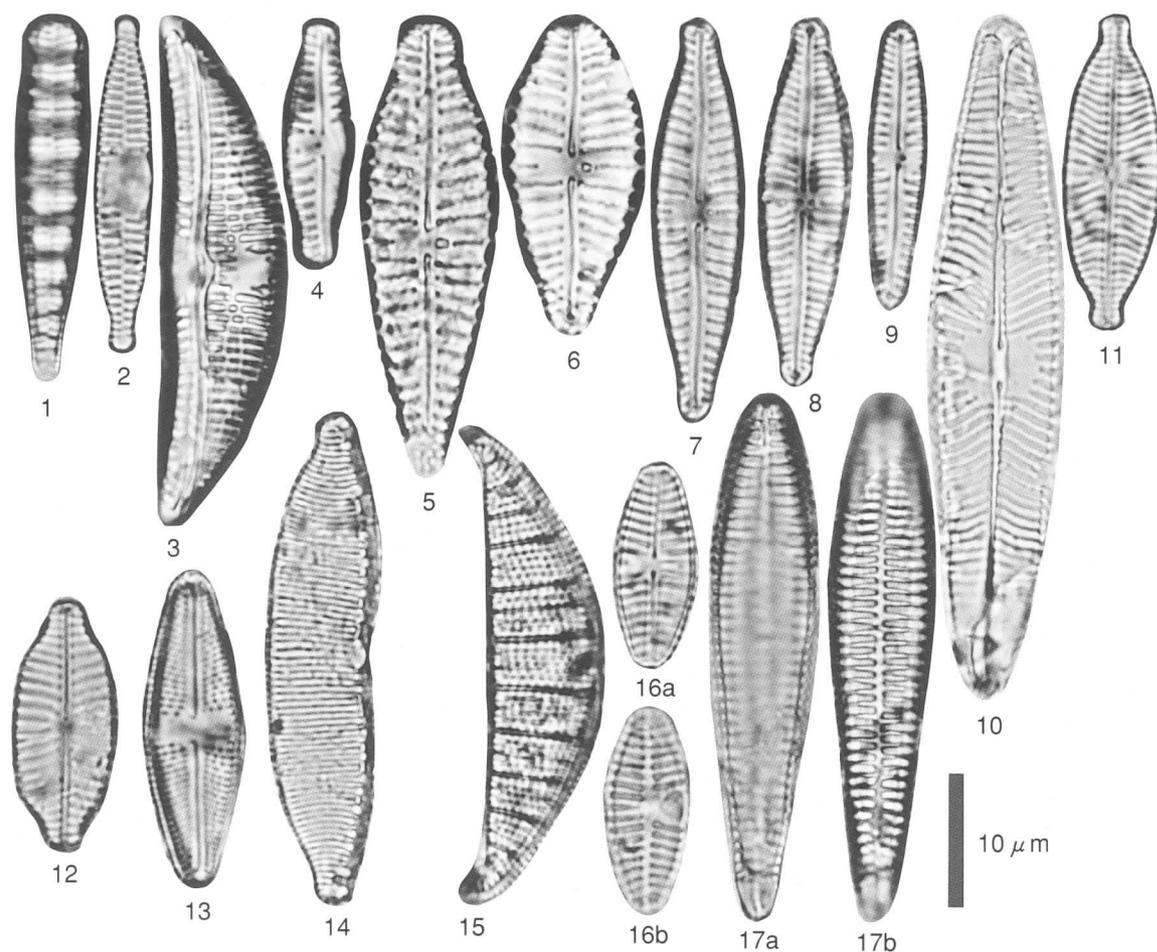
2. ハンノキ属

4. コナラ属コナラ亜属

6. トチノキ属

8. マツ属

写真11 産出花粉化石



1. *Meridion circularae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck
2. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.) Petersen
3. *Amphora affinis* Kuetzing
4. *Cymbella sinuata* Gregory
5. *Gomphonema helveticum* Brun
6. *Gomphonema helveticum* Brun
7. *Gomphonema sarcophagus* Gregory
8. *Gomphonema parvulum* Kuetzing
9. *Gomphonema pumilum* (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot
10. *Navicula lanceolata* (Agardh) Ehrenberg
11. *Navicula decussis* Oestrup
12. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick
13. *Navicula mutica* Kuetzing
14. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow
15. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lange-B.
16. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow
- 16a
- 16b
- 17a
- 17b

写真12 産出珪藻化石

---

## 五斗田遺跡

— 県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 —

平成13年3月28日印刷

平成13年3月30日発行

発行：長岡市教育委員会

印刷：株第一印刷所

---